

17
579

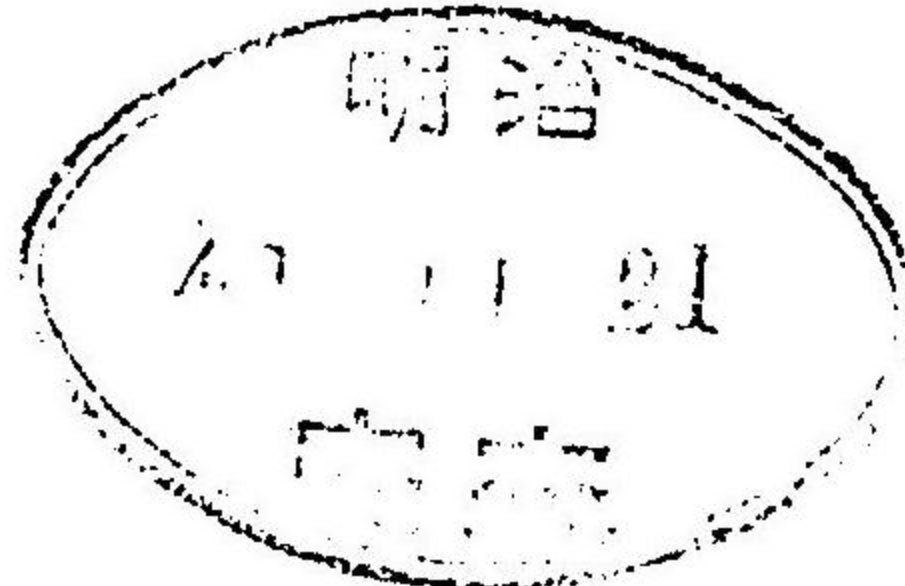
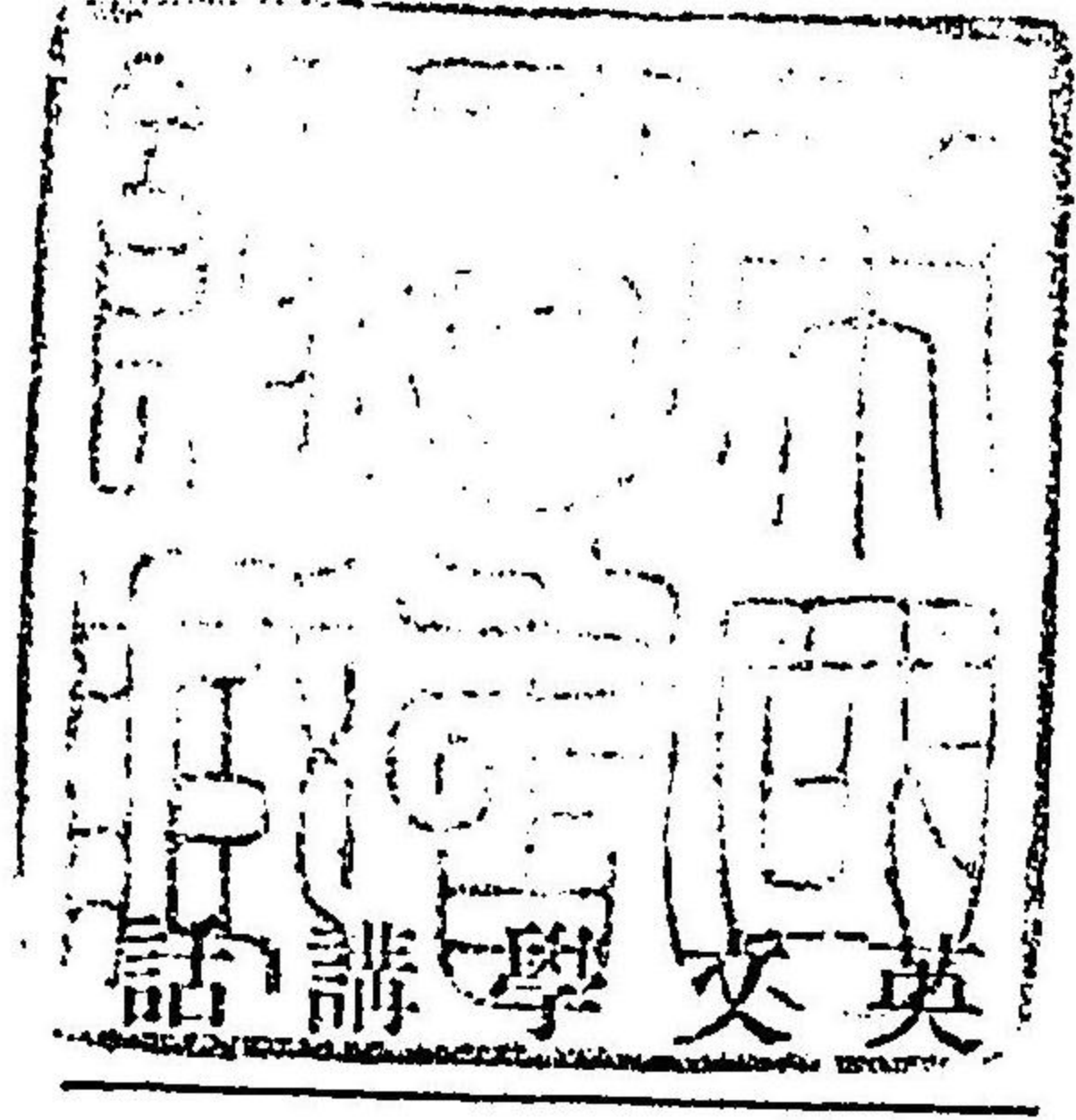
著骨秋川戶

英文學講話

全

東亞堂發兌

14-379



目次

緒論…………… 一

英國の詩祖「ジョーザア」…………… 二

シエーキスピア…………… 四

エリザベス時代…………… 六

スペンサー…………… 七

文藝復興…………… 九

ミルトン…………… 三三

小説家…………… 三六

アライソン…………… 三九

スウィフト…………… 四三

「ローマンチズム」「ナチュラリズム」…………… 四四

目次

目次

ウォーズワオルス……………一〇
 バイロン……………一五
 シェリー……………二五
 十九世紀の英文學……………三〇
 湖派詩人……………三三
 キイツ……………三六
 スコット……………三九
 ド、クインシー……………四六
 ラム……………五〇
 千八百三十七年……………五三
 デイツケンズ……………五七
 ビック、ウイック……………七〇

サツカレ……………八四
 リットン……………九七
 キングズレー……………一〇〇
 「オックスフォード、ムーブメント」……………一〇六
 ニューマン……………一〇八
 希臘思想。ヘブリュー思想……………一一〇
 テニスン……………一二八
 プラウニンゲ……………一三三
 ロセツテイ……………一三四
 評論……………一三七
 雜誌……………一三七
 マコーレー……………一二六

目次

カーライル……………一〇〇

マシュー・アーンホルド……………一〇三

ラスキン及び其他の批評家……………一〇四

アロンテ……………一〇五

エリオット……………一〇六

ステイザンソン……………一〇七

人間の獸性……………一〇八

英國の獨創的長所……………一〇九

文學と科學……………一一〇

目次——(終)

英文學講話

戸川秋骨述

緒論

英文學といふものは、どんなものか、その大體をお話する積りですが、長い歴史を持つて居るこの文學の事は一日二日ではよくお話し盡くす事は出来ませぬ。それ故十九世紀の英文學丈けをお話しやうと思ひますが、それにしても十分な事は迎も出来ず、また十九世紀の事をお話するにしても多少昔の方から申さなければな

りませぬので、結局は極くくあらましに全體をお話する事になります。

先づ直接文學には殆ど關係のないやうなことでありますけれども、英文學のどんなものであるかと云ふことを御話するにはチヨット其前に申上げなければならぬことがあります。それは歐羅巴の人種に二種あります事で、その一つは羅甸人種とモウ一つはチエートン人種であります。此兩人種が居ると云ふとは御承知であります。處が主として此兩人種がその代表的の文學を持つて居るが、今文學に入ります前に御話をする

といふのは此兩人種が代表して居る言語の事でありませぬ。即ちその一は「ローマンス語」でまた今一は「チエートニツク」語であります。それで昔から此兩人種が歐羅巴の舞臺に活動して居り、さうして文藝の上にも此二つの言語が活動して居つた。即ち此二つの言語が代表者を有つて居る。代表者と云ふのは文學である、それではどれが代表者かと云ふと「ローマンス語」は羅甸文學といふ立派な代表者を持つて居ります、併し羅甸文學は中世紀以前のことであるからそれは暫く措きまして、近世の「ローマンス語」を代表して居る文學を求めるとそれは佛蘭西文學である、それから「チ

ユートニツク語」を代表する文學は何かと云ふと、是れは少し困るのであります。是れは極く嚴密の意味に於て云へば獨逸文學であります、けれども、併し英吉利文學が矢張此「チユートニツク語」の代表者である。極く嚴密の意味から言へば成程獨逸ですけれども、併し秩序の立つて古いといふ點から言へば英吉利の文學が「チユートニツク語」の代表文學である、今何故英吉利文學が「チユートニツク語」の代表者であるかと云ふとに就て一寸申し上げますが、英吉利の人種は御承知の通り妙な人種である。申すまでもなくそれは「アングロサクソン」である、「アングロサクソン」ではある

が其中には種々な人種が這入つて居りまして殊に一番勢力を占めて居るのは佛蘭西の人種であります。例の「ノルマンコンクエスト」で「ノルマン」人が這入つて英吉利を征服した、其時にスツカリ前のサクソン人種です、彼の大陸から渡つたサクソン人種が「ノルマン」人の爲に押へ付けられてしまつた、それで言葉などが殆ど「ノルマン語」になつてしまつた、「ノルマン語」はと言へば先づ佛蘭西語と言つて良い。今日の英語を取つて見ましても佛蘭西語から出たところの言葉とそれから「サクソン語」即ち獨逸派の言葉とが混つて居る、それで英語は非常に複雑した言葉になつて居

りますが、さういふことは直接に英文學に關係のないやうなことですけれども、言葉として關係がありますから、御話して置きます 併し其本來今の英語はどちらが本になつて居るか云ふと、それは矢張「チエートニツク語」即獨逸派の言語が本になつて居る、何がそれを證明するかと云ふと、「文法」が明かに證明して居る。即ち文法上英語の系統は獨逸語に屬するものである。さう云ふ點からして此英吉利の言語は矢張「チエートニツク語」の中に屬するものであつて従て英文學は矢張「チエートニツク語」を代表した文學であると云ふことが言へる、さういふ風に「チエートニツク

語」の代表を以て英文學とする、それから「ローマンス語」の代表を佛蘭西英文學とする。それで茲に二つの立派な文學が歐羅巴に出來た。英文學と云ふものはさう云ふ風な位置に立つて居る、それで古い處から――古いと言つてもどうせ近世のことですから其中世紀所謂以後のことです、即マア十五世紀か或は更に遡つて十三世紀頃から、英文學は今日まで其系統が連綿として續いて來て居る。それが即ち英文學であります、一方に於て「ローマンス語」の代表して居る、佛蘭西文學も同様に昔の羅甸から承繼いでさうして矢張中世以後に引續いて今日まで來て居る、歐羅巴の文學で古

いとを以て誇り且系統の連綿として續いて居る處を言へば此英佛兩方の文學である。英文學と云ふのはさういふ風な位置に立つて居る。

序でに御話し致しますが、歐羅巴にはイロ／＼各國が代表して居る文學があります、獨逸文學があり、露西亞文學があり或は近頃には於ては瑞典とかノルウェーとかが代表して居る文學が出て來た、是れは極く近世のものである、近世と言ひましても殆ど十九世紀以後のものと言つても宜いのです。さういふのは新しい人種が其處に又勢力を占めて來たから起つたのである。今までは

獨逸派の人種とそれから一方の羅匈人種とが勢力を占めて居つた、此二つで以て立派に並んで來た、處が十九世紀以後になつては今の瑞典とかノルウェーなどの人種がナカ／＼勢を得て來たのである。それから一方には露西亞の斯拉ブ人種が大變勢力を占めて來た、さういふ風にして大陸の各國にイロ／＼な新しい勢力が出來て來た。それで皆各立派なる代表の文學を有つて居る。恰度之を今の世の中に當篋めて見ますると斯う云ふ風になつて居る、英吉利と佛蘭西の文學は古い門閥家であつて例へて言へば三井家とか或は住友家と云ふ風なものである、處が今日でも三井住友ばかりが大家でな

くイロく明治になつて巨萬の富を得た立派な家も出来て来たと言ふ譯でそこには岩崎家もあらうし、澁澤家はどの位金があるか分らないが、澁澤家と言ふ者が出来て来た、此等が今の露西亞文學なり、或は獨逸文學なり或は「スカンデナヴィヤ」文學とか云ふやうなものでありますが、今日日本の文壇では大陸文學が——大陸と言ふのは今の露西亞文學とか或は瑞典文學とか——ノルウェー文學は「イブセン」が代表して居る——或は獨逸文學とかが大變流行つて居るやうである、それはどうも一番吾々に分りが宜いのです、それで大いに流行して居る。英吉利とか佛蘭西も随分流行して居りま

すが英吉利の文學と言ふのは今申す通り古い家柄のやうな者で永く續いて来て居るから歴史的の意味が澤山這入つて居る。それですからチヨット近寄りにくい。一つの詩があつてもそれはズット前後の系統を引いた關係を有つて居るものである、小説が出て來てもそれが或時代を爲して居るものとか時代と關係したものと云ふやうな傾きがあつてチヨット分りにくい、随つて言語としてもチヨット分りにくい、處が澤山あるさう云ふ意味で英吉利文學はむづかしくもあり、又吾々にチヨット縁の遠いやうな處があるのです、併し文學の種類が多いとか或は又優れて居ると云ふやうな點に於

ては矢張舊家で大家であると云ふやうな譯で非常に外の國の文學よりは優れて居るのがある、先づさう云ふやうな位置に立つて居るのであります。

英國の詩祖「チョーサー」

それで此英文學は何處から通例研究して行くものであるかと云ふと、御承知でせうが「チョーサー」之れからが始まりです、此前にもイロ／＼ありましたが、之れが先づ言語の上から言つても詩の上から言つても一番始りであります。この邊のことは吾々には容易に研究が出来ない譯ですけれども、英吉利の詩の先祖とし

てある人は即ち此の「チョーサー」であります、是れは併し極く古い十三世紀に出た詩人でありますが、此の人から英吉利の文學が興つたと言つても宜ろしい、と云ふのは此の人が「カンターベリテールズ」と云ふ詩を書いた。それにはイロ／＼な人が「カンターベリ」の御寺に御寺参りをする。その中には武士もあれば商賣人もある、と云ふ、それがイロ／＼な物語をする、即ち各自が自分の經歷話をする、それが餘程面白い、それを巧く詩に作つたのですから丁度澤山の小説を集めぬやうな者です、ところがそれは詩としても宜いですが、之で以て英吉利の言語が一定したといふの

です、それ故此の人は今日の英語の基を定めたといふので其點に於て非常に名高い人である。此人は飛び抜けて十三世紀に居つたのですが、それから後澤山な人が出て居りますけれども、それはさう特別に詳しく御話する必要がないのですから直に飛んでしまつて例の「シエーキスピヤ」と云ふものが現れた事になります。

シエーキスピヤ

それは十六世紀であります、十六世紀に「シエーキスピヤ」が現はれた、併し「シエーキスピヤ」と云ふ人は名高いので是れは諸君も疾くに御承知のとですから

して別に申しませぬが、併し「シエーキスピヤ」が出た時代は大變注意すべき時代である事丈けは、申して置かなければならぬ、と云ふのは此十五世紀頃は歐羅巴全體が舊式の考を打破つてさうして新しき時代に這入つた時である、それは則ち名高い文藝復興ルネッサンスと云ふ非常な大事件であつた。此事が既に一つの大きな題目ですが、文藝復興と云ふもので歐羅巴が立派に革新をされたのです。即ち中世紀に主に宗教に依つて壓伏されて居た人間の思想がイロ／＼なる動機で以て活動を始めその宗教の形式を破りこゝに新しい人間の精神が發揮された、それが即ち文藝復興ルネッサンスです、そして其潮流に

出たのが「シエーキスピヤ」である。寧ろ其勢に驅られて出来た時代が英吉利の「エリザベス」女皇の時代である。

エリザベス時代

彼の時代が即ち英吉利に文藝復興の現れた時代である。それで其時代の最も宜い代表者が「シエーキスピヤ」である。併し當時「シエーキスピヤ」の外に澤山實に、ウヤ〜 大家が居つた唯「シエーキスピヤ」が一人名高かつた者です。高からして當時の代表者となつて仕まい殆ど大家は「シエーキスピヤ」一人のやうに思はれ

て居ますが、實は「シエーキスピヤ」計りではない「クリストファ、マロー」とか「ベン、ジョンソン」とか皆立派な戯曲を書いた人です。それからまた「ボームント」「ブレツチャー」とか「グリーン」とか戯曲家は澤山ありますが、孰れも非常な大家です。實に是等は皆「シエーキスピヤ」と竝んだ大家である。それで此等は戯曲の方ですけれども、更に詩の方では「スペンサー」と云ふ詩人があつた。

スペンサー

此人が「フェアリー、クイーン」と云ふ詩を書いた。此

詩は日本の馬琴の八犬傳のやうなもので、意味は殆んど全然違ひますけれども、恰度似た處は八犬士が仁義禮智信を現はして世の中に立つてイロ／＼なことをするやうに、矢張英吉利の仁義禮智信と言つたやうな徳義を代表した人物がイロ／＼なる活動をすると言ふ話である、先づ大體はそんなものですが、斯ういふ風な大家が當時の「エリザベス」時代に現れて非常な全盛を極めた、また其外にイロ／＼なものがありました、それは略して置きます。唯小説はなかつたのですが、――ないとは言へませぬけれども小説で注意すべきものは先づないです、それは随分立派な作物もないとは言

へないのですけれども、今述べたやうなさういふ作と竝んで稱せらるゝやうなものは餘計ない、マア何と言ひませうか竹取物語とか榮華物語と云ふ位なところのものはあつたでせう、例へば斯ういふものがある「アガチャ物語」或は「ユーヒユース物語」斯んなやうな種類の小説があつたけれども、今日言ふ處の小説などとは少し違つて或は土佐日記とか竹取物語とか云ふやうな種類に屬するものでありませう。之れが其「エリザベス」の時代である此「エリザベス」の時代は英吉利の國力并に精神の旺盛であつた時代である。

文藝復興

一體文藝復興と云ふのは或意味に於ては宗教を打破したのでさうして新しい思想を其の處へ興したのです、それですからして其の結果大變人間の思想が放埒になつた傾きがあります。何んでも恰度道德の標準がなくなつてしまつたやうな譯であるのですから、やゝ世の中の調子を亂したやうな趣もある。尤も此文藝復興と云ふことは決して道德を打破つた譯ではない、則ち古い宗教のイロ／＼なる極く良くない弊風と云ふやうなものを打破つたのであつて決して宗教を打破したので

はない、それですからして實は決して世の中を亂す筈ではなかつたのです。なほそれに添えて申しますが、此文藝復興と云ふものが一方に於ては變じて宗教改革になつて顯はれました。それから言つても決して宗教を此文藝復興と云ふものが打破したものではないけれども今までの教權といふ様な宗教の威嚴の一部を成したものは確に打破した。例へば法皇の權力とか或は僧正の力と云ふやうなものは大分打破されたのです。それですから其結果は末に至ると大變放埒に流れてしまつて多少世の中の調子を亂したのです。エリザベス時代は則ち斯様な時代の影響を受けて居たのでした。さ

ういふ風な時代から今度はそれに反動して新しい又宗教といふものを其處へ興して來るやうな氣運が向いて來た、その運動が例の「ビュールリタン」と云ふやうなものである、其時代が名高い「ミルトン」と云ふ詩人を以て代表されて居る。

ミルトン

是れは御承知の通り「パラダイス、ロスト」を書いた人です、則ち名高い「失樂園」と云ふものを書いた人は之れであります、是の詩は人間の幸福であつた時代から今日の状態になつたその所因を謳つたのです、そ

の筋を申すと一方では人間が神様の拵へた結構な樂園に喜んで住で居る。さうすると悪魔と云ふ奴が其處へ來る。其悪魔と云ふものは天の使の變化したものである。天の使で「ゴッド」に反抗した奴である、則ち悪魔は「ゴッド」の家來であつたところが其「ゴッド」に對し不快の念を抱いてそれで一つ反抗してやれと云ふので何でも「ゴッド」のすることを打破さうとした。それで天地の創造を聞き悪魔等の相談を始める。何んでも「ゴッド」が人間を拵へたさうだがあれを己れの方へ引入れて遣らう左様して「ゴッド」の業を妨げやうと、先づこんな相談をしたのです。それから悪魔が

神様の方へ押し寄せて来るといふ處もある。さうすると之を「ゴッド」の方でも知つて「ゴッド」の下に居る天使などが出掛けてそれを喰止る。則ち天空で天軍と魔軍とが火花を散らして戦ふといふ事になる。餘程壯嚴な詩である。經文などにはさう云ふことが澤山ありませうが、矢張それと同じやうな譯で大變壯嚴の趣が見える。それで一方には又「ゴッド」に創造された地球には「アダム」「イブ」と云ふ人間の祖先が居る。彼の二人が地球では楽しくして居る、非常に愉快な樂園に居る、ところで悪魔は前の相談に依り轉じて到頭地球へ遣つて来て巧く人間を自分の方へ引込むたので

す、則それには第一女を欺すのが一番宜からう、とさう言つたかどうか分らないが、さう言つたやうな態度を取つて先づ女を欺いた其話は舊約全書にあります。それを御覽になるとその事はよく分りますが、その話は次の様な事です。何んでも樂園に「ゴッド」が食つては往けないと云ふ木の實がある。悪魔はそれを「イブ」なる女を欺かして食べさせたがそれがナカク甘い、それから「イブ」は亭主に——亭主と云ふのは可笑しいが「アダム」に喰つたら宜からうと云つてそれを頼つた「アダム」もそれを喰つて見た處が甘かつた併し此れが則神様の命令に反いた事でそれが爲に「バ

ラダイス」の樂園を出なければならぬ様になつた。そこで其樂園を二人が手を携へて出て往つた。斯ういふのが則ち失樂園です、それは誠に可笑しいやうな話でありますけれども、一種の悲劇です、悲惨の話である、と同時に如何にも能く人間の變化し若くは墮落して行く状態を現はして居る、どうもお互、諸君はどうか知らぬが、私共にして見ると何時でも善惡の戦が心の中に起つて居る、してはならないことをやつて見たくない。善玉惡玉に人間が引かれて居る處が繪に描いてあるが簡單に言へば「バラダイスロスト」の意はアレです、即ちアレを極く深く考へて又壯嚴なる文に現はし

たものです。マア非常なもので、これは英文學では非常に尊重して金科玉條として居る詩です。マアさうありさうなことであります、詰り人間の墮落史と言つても宜うございませぬ、墮落史と云つては拙い計りでなく意味が足りませぬ。人間の一大悲劇です、必ずしも是れは一時代に限られることではない人間のある限りの一つの悲しき歴史を現はしたものです。それで「ミルトン」の話を餘り長くやると他のことが出来なくなりますが、それから降つて來てはモウそれ程注意すべきところのものはない、直ぐに十七世紀の終り、それから十八世紀に掛るのです。即ち十七世紀の終り十八

世紀頃に至つて初めて小説が出来て来た。初めてと云ふことは言へませぬが、今日で言ふやうな所謂小説と云ふものが起つて来たのです。

小説家

其人々を假りに二つ三つ挙げて見ると云ふと「フィールディング」とか「スモレット」「リチャルドソン」「スターン」斯う云ふやうな人が出て来た、是等は皆大家です、且又長い小説を書いて居る、恰度馬琴の長い八犬傳と云ふやうな工合に馬鹿に長い小説を書いて居る、今日では作る人も餘りないでせうし——迎も書く

ことがむづかしいでせうし、読むのさへ餘り樂なとでないやうなものである。併し皆立派な作ではある、例へば「オイディング」の傑作を云へば「トム、ヂョーンス」是等はマア読むのも大變で読む人は少ないでせう、けれども、矢張今日でも立派に行はれて居る。それから「スモレット」の「ペレグリン、ビックル」と云ふ本がある、「リチャードソン」のは「サー、チャルナス、グランヂソン」夫から「スターン」の「トリストラム、シヤンデー」といふのがあります。丁度此時分の小説は恰も馬琴流で勸善懲惡と云ふ意味を含めたものです。アレ程ハッキリ善い事をすゝめ悪い事をし

てはいけないと云ふことはないが、先づ大体に於てさういふやうなことを言つて居るのである。併し此十七世紀十八世紀になつては今小説のと言ひましたけれども小説以外にもイロ／＼なるものが現はれて來て居る。名高い散文家で「アヂソン」と云ふ人がある。それから「スイフト」も大家です。この外「ジョンソン」「デフォー」など何れも一方の大將です。

アヂソン

此の時に「アヂソン」に依て雑誌と云ふ者が初めて出來た初めて／＼もないでせうけれども、先づ雑誌らしい

雑誌としては初めてと言ふて宜いでせう、是れは「スペクテートル」といふのです。今でも「スペクテートル」と云ふ雑誌はありますが、それは違ふです。「アヂソン」は「スペクテートル」(見物人)と云ふ雑誌を拵へた當時の社會なり又主に政治の事に就てやかましく説を立てゝ居る。それは所謂政治論とは違ひますが、之れがナカ／＼孰れも立派なもので、その調子が今日普通出て居る處の雑誌とは全く選を異にして居る。其雑誌に出た者は皆立派な作である。之は「アヂソン」の「スペクテートル」として悉く一冊の本に纏まつて居ります、雑誌ですから面白い處もあれば面白くない

處もあつて大變讀みにくいですが、兎に角雑誌が本になつて「スペクテートル」として發賣されて居ります、その内にはイロ／＼な大家の寄書もあります。それから諸君は或は御讀みになつたことがあるかも知れませぬか、「サー、ロージャー、デカバリー」といふ本がある。是れは私共が教へたこともありませんし、又教はつたともありますが一種の小説です。「サーロージャー」と云ふ人が居て其人の滑稽を演ずる事によせて時勢を諷刺したものでありますが、それなども此雑誌の中に毎號續いて書いたのを撰抜したものです。さう云ふ種類のものが「スペクテートル」と云ふものに載

つて居る。

スウィフト

夫から「アヂソン」と並んで「スウィフト」と云ふ人がある。是は非常な散文の大家で、御承知でありませうが「ガリバー」の「島巡り」と云ふものがある。之も矢張時勢を諷刺した——諷刺したと云ふよりは寧ろ罵倒したものである、或る所へ行つて見ると馬が馬車へ載つて居ると人間がそれを輓いて居ると云ふやうなのがある。マアどうもさういふところは随分ありさうで馬より劣つた人間が澤山ある。斯ういふやうなところを諷

したものである、又或る所へ行つて見ると哲學思想もない癖にイロ／＼な高尚なことなどを考へて器械を動かして哲學をつくらうとして居るものがある。此れ等は日本の今の或る學者を諷刺したものかと思はれる位です。此本はその一部分が翻譯にもなつて居ますから諸君も御承知でせう。小人島へ往つたとか或は大人國へ往つたとか云ふやうな其點が主に譯されて居る。又日本に古くから譯されて居る「デフォール」の「ロビンソンクルソー」も此の時代の大作です。散文の方は大略そんな風であつたが、それから散文に對して、詩の方面を見るに此詩の方にはドライデンと云ふ人が在た

又「ボープ」と云ふ人が在た斯ういふ人の詩は前の「ミルトン」の様なあんな大作ではない、別に思想に於てもまた世の中に於ける勢力に於てもアレ程ではないのですけれども、併し當時の大家であつた。大家どころではない詩の方の歴史から言へば非常な偉い人であつた。ところが十八世紀には斯ういふ風にイロ／＼なる人が出て來て居りますけれども、世の中が大變に俗であつた。所謂詩的でなかつたとしても云ひませうか、極く奇抜と云ふことがなかつた。是れは世の中の秩序が付いて來て、さうしてもう凡ての事が極まつてしまつたものですからして少しも其間に面白味がなくなつて

しまつたのでせう。それですからして斯う云ふ人が立派な詩人であるけれども、そして其詩はナカ／＼巧いけれども、思想など、云ふ點に於ては大變落る。大變劣つたものである。ところがさういふ風は當時何處にでもあつた、——何處にでもあつたと云ふと可笑しいですが、英吉利計りではない、佛蘭西などでは殊に世の中が單調になつて來て面白くなつて來た。

淺薄と云ふては或は悪いかも知れませぬけれども、兎に角極く深遠な知識ではなくして廣くイロ／＼な物に觸れてイロ／＼な物を見て居るけれども、併し深い處

はないと云ふ風になつて來た、それで英吉利の詩も矢張さう云ふ風に極く思想などが深くなく淺薄になつて只詩の形などに却つて重きを置くやうな風になつて來た。それをこの時代の此の詩風を稱して英吉利の（大陸でも同様ですけれども）、それを「クラシニズム」（古典主義）と云ひます。（古典主義）はどう云ふのかと云ふと思想と云ふことは餘りやかましく言はないで形を重んずると云ふやうな風で、それが當時非常に唱導されて來て居つた。是れは英吉利計りでなくして佛蘭西にも非常に行はれた、是れは外の國にもあつたかも知れませぬけれども、併し一番初め御話した通りにまた

十九世紀の初め頃には獨逸であれ或は露西亞とか「スキャンデニビヤ」などの文學は充分發達して居らない。當時盛んであつたのは矢張此前に比較しました住友なり或は三井なりといふやうな舊家である、舊家が巾を利して居つたのである、即ち英文學と佛蘭西文學と此二つが歐羅巴の大勢を支配して居つた、それで其兩方に古典主義が非常に行はれて居たといふものである。是れは詳しく御話すると大變面白い問題であると云ふのは實に文學上のみでない社會の問題に關係のある事故であります。則ち社會の状態としてイロ／＼の方面から論じなければならぬことであらうと思ふのですが、

兎に角世の中が大變秩序が立つて極つてしまつて面白くなくなつてさうして深い考がなくなつて來たのです。所がさう云ふ世の中を打壞はさうと云ふ事が起り始めた、即ち世の中は斯んなものでは逆も駄目だ之れを打壞はさなければならぬと、さう云ふ考が自然に諸方へ起つた。其結果が佛蘭西の革命（フレンチレボリユーション）である。是れは諸君は歴史で御承知でせうが非常な大事件で在て「ルイ十六世」は忽ち殺されてしまふ、實に國王を殺すのみならず御互ひに昨日まで信頼して居つた者も少しでも疑しいところが一方に見えると忽ちその首を斬つてしまふと云ふやうなことをやつた。

非常に恐しい時代であつた。此佛蘭西の革命と云ふのが大變文學に關係がある、何故に關係あるかと云ふに佛蘭西の革命思想が文學の上に非常な影響を及ぼしたと普通は斯う云ふ風に説いて居るです、所が私の考はさうでない、逆まです文學思想が革命を起したのであると私は左様思ひます、當時の歐羅巴の人心が歐羅巴と申しますると今申す通り主に佛蘭西と英吉利ですが今までの世の中に飽きた、斯ういふ世の中は打破しなければならぬ、といふやうな非常な元氣があつたのです、この元氣が文學思想となつて顯はれそれが發して佛蘭西の方に往つては彼の革命と云ふものを起したの

です、彼の「チャン、チャック、ルソー」と云ふ人があるでせう、あゝいふ人の筆を持つてイロ／＼なことを書いた、その思想が發して佛蘭西の革命が起つて來たのである、新思想が湧いたからあゝ云ふ革命が其結を果として起たのでありませう、英吉利でも「ドライデン」とか「ポープ」と云ふやうな古典主義の詩人が勢得て居たのを、是れではいかぬ、どうしても斯んな世の中ではいかぬ、どうしても世の中を改造しなければならぬと云ふやうな考が自ら起つた、それで佛蘭西の革命の時分に英吉利にもさういふ考の人が澤山居つたけれどもさう云ふことは此處で御話する必要もないで

すが詩の上で以てさう云ふ種類の人が現れてさうして詩の思想や形式などを改め始めた、それが即「ポープ」などの後に顯はれた詩人です、蘇格蘭の詩人「パーンス」と云ふ人などは其先驅である。是れは百姓から起つた人で殆ど學問などはないのですけれども、自からさう云ふ思想に驅られて立派な詩を作つた譯である。之れは少し古いですが、未だ十八世紀の末に屬するけれども、それから後に至つて英吉利には名高い「ウォルズウォルス」とか「バイロン」とか「シエレー」と云ふやうな人が現れて來たのです。

是れから十九世紀に這入りますが、十九世紀は詳しく御話をしたいと思ふのですけれども餘裕がありません故矢張概略を申します。さて十九世紀初めの人は今までの古典主義に反對な態度をとりました。其反對したものを概稱して「ローマンチズム」と云ふのです、可笑しいとは此「ローマンチズム」が所謂「ナチュラリズム」である、明らかに「ナチュラリズム」と云ふことは言へませぬけれども、一寸此兩者は全然反對した處のあるに拘はらず似た處があります。

「ローマンチズム」「ナチュラリズム」

今此「ナチュラリズム」のことを一寸御話して置きますが、今日この「ナチュラリズム」と云ふことを文壇で大變やかましく言つて居ります、けれども、それは今此處で言ふ「ナチュラリズム」とは大分違ふですが、併し今日のも矢張此「ナチュラリズム」から來て居りはする。今日云ふ「ナチュラリズム」は「ローマンチズム」に反對して出來たのである、併し乍ら其本です、其本を言ふと此時代には「ローマンチズム」

が即ち「ナチュラリズム」であつたのです。かく云ふと餘程可笑しな話ですけれども實際さうなのです。抑も「ローマンチズム」は其前にあつた「クラシシズム」に反對して起つたのです處で「クラシシズム」は所謂古典派は秩序整然として形を具へた詩なり文なりを作り、又其詩なり文なりをさう云ふ風にしなければならぬ、と云ふ主義です。それでこれに反對したのが「ローマンチシズム」です。「ローマンチシズム」の考ではそんな順序を履む必要はない。何でも吾人は思つた通りに思想を出さなければならぬといふ。此れは即ち今日の「ナチュラリズム」が言ふ處の一面です。即ち

當時の「ローマンチズム」は今の「ナチュラリズム」と似て居る。妙な事ですが事實さうです、それで人間の考へたことはその思つた通りにドン／＼發表しなればならぬ、斯う云ふ點は成程「ナチュラリズム」ですけれども「ローマンチズム」には又夫と少し異つた點がある。それは何かといふと「ロオマンチズム」での主張に依ると斯様いふ事がある。人間の心と云ふものは今日の社會状態に従つては逆も自然に往かれない、ズツと考を古に戻して昔の人の考にならなければならぬ、斯う云ふことになつたのです。此處に至つて「ナチュラリズム」とは大變違つて來る。そこで「ロー

マンチズム」は中世主義と云ふことになつて來た、考を昔に戻さなければならぬ、昔の人の心にならなければならぬ、斯う云ふ考を起さした、そこで以て大分「ナチュラリズム」と違つて來て中世主義と云ふやうなものになつてしまつた、末に到つてはさうなつたですけれども、其元は矢張破壊主義であつた。「ナチュラリズム」の稱へる處と同じであつた。デ十九世紀の文學は「ローマンチズム」と「ナチュラリズム」とが二つづゝ揉み合つて今日では此二つが敵視して居る、敵視して居りますけれども要するに其元は同じことであつた。さう争ふべき筈はない、争ふと言へば未の方にあるの

です。當時の「ローマンチズム」は全く新思想であつた。「ナチュラリズム」も非常に今日は相違したものになつてしまつて居る。私は日本の歌の事などは知りませぬけれども、桂園派の主張と眞淵派の主張との相違が此の争に似て居りはせぬかと思ふ。桂園派のです、景樹派の歌と眞淵派の歌は兩方共に結果に於ては違つて居る、又思想としても違つて居るですけれども、要するに同じことになるのではないかと云ふ想像があります、例へばマア私は一向歌は知らぬからして間違つて居るか知らぬけれども所謂景樹派は自然をなだらかにどんなものでも詠ふやうにと云つて、さうして有り

の儘に詠ふと云ふことであるが、眞淵の主義であると歌は萬葉に限る總て萬葉の句調にならなければならぬといふ。これは大變反對して居ますけれども、歸する所は萬葉の心は何かと云ふと自然だと思ふ、萬葉の歌には人の心に自然を感じたところの有りの儘が寫してある、唯末の形に於てイロ／＼議論がありますが本は似たやうなものであると思ふ。恰度さういふ趣が「ロマンチズム」と「ナチュラリズム」にありはせぬかと思ふ。

ウォーズウォルス

「ウォルズウォルス」を香川景樹に比較した人もありま
すが此「ウォルズウォルス」は極く平凡な題目を取つ
てそれを詩に詠つた人である、恐らく此人の詩は詩に
ならぬと言はれるほどである。例へば極く古典風の眞
淵派から言へば景樹風の歌は一向駄目だと云ふ風に「ウ
オルズウォルス」の詩は駄目であると云ふやうに了解
される。前に「ミルトン」の壯大な詩、ア、言ふので
なければ詩でない、歌でない、斯ういふ風に考へて居
る人もあつた。「ミルトン」は古典的ではないけれども

併し古典主義から言つても大家と呼ばれるに足る。と
ころが「ウォーゾウルス」の詩は何かと言ふと此處
に猫が居る猫が落葉に狂つて遊んで居る、それが大變
面白い、之れを詩に詠ふと云ふ、詩の題目として「ミ
ルトン」の如き人のと非常な相違である、さういふや
うな相違があるのですが、其處は即ち所謂「ナチュラ
リズム」であつて即ち前の古典主義に反對した所であ
る、「ウォルズウォルス」の詩風はそんなものである。

バイロン

「バイロン」に至ては亂暴もので殆ど英吉利にも居られ

ないやうな人であつた、恰度佛蘭西の革命を文藝の上
に代表した人で、國などはどうでも宜い、それから宗
教は皆打破してしまへと云ふのであつた。さうハツキ
リと明言は仕なかつたがまづそんな考を持つて居た。
それからして素行に至つては勿論無茶苦茶であります。

シエレー

「シエレー」も同様な詩人でした。只も少し塵界を脱し
て超然とした處があつたのです、併し大體から言へば
同種類です、二人共國を去て國に居られないで「バイ
ロン」の方は希臘の革命軍に投じて死でしまつた「シ

エレー」の方は伊太利の「レゴーン」と云ふ處で水に
溺れて死でしまつた、此れ等の詩人は孰れも思想界に
革命を遂たと言て宜いのでありますが、其内「ウオル
ズウォルス」は今言た通り、極く穩かな方で或は靈魂
の不滅を歌ひ或は極く寂しい處に稻を刈て居る女の其
寂し味を見て居る「バイロン」や「シエレー」の詩は翻譯
もあるから一々言はなくても御承知でせうけれども
非常な勢ひで世を罵りまた嘲つて居る「バイロン」の
書いた物は「ウオルズウォルス」を馬鹿にして罵つて
居る、罵るよりは餘程嘲弄して居ることがある、それで
十九世紀の文學は殊に英文學は此「ロマンチズム」

及び理想主義并に「ナチュラリズム」とがズツと續いて今日まで來て居る、是れが十九世紀の文學を一貫した處ものである。

十九世紀の英文學

此處で尙ほ一言英吉利の十九世紀の文學に就て申して置きたい事がある、それは十九世紀に於て特に英吉利の文學の盛大で在た事である。抑も此文學と云ふものは世の中が進むに従つて衰へると云ふやうな考を有つて居る人があるかも知らぬ、それは十九世紀の英吉利文學が明らかにさうでないことと云ふことを證明して居る

が、それを此處で御話して置きたいのです、「マコーレー」と云ふ人がありました彼の人が「ミルトン」を論じて斯ういふことを言つて居ります、詩と云ふ物は想像に依つて成るものである。それで昔は知識が不足であるからして想像の方が大變強い、それであるから其想像力に依つて成立つ處の詩は昔に於て優れて居る、詩は昔の方が宜い、今日では駄目である、斯ういふやうなことを「ミルトン」を論じながら言つて居る。是は大變勢力ある説のやうになつて居る。斯ういふ論から推して往くと文學と云ふ物は世の中が進むに従て衰へて往かなければならぬ。何故なれば「マコーレー」と云

ふ人は外の文學に付いて言つたのではない、詩に就て言つたのですけれども、併し詩も文も結局それは同じことであらうと思ふ。凡そ文學には感情が主にならなければならぬ、それが世の中が進むと其反對のとなつて来て智識が増して来る、智識が増してイロ／＼なものが明らかになつて来るから想像力が減つて来る。「マコーレー」がさう言ふですけれども、さうすると世の中が進むに従つて文學が駄目になつて来ると云ふ結果にならなければならぬ、所が此際に英吉利の文學に就て見るとどうかと云ふに、此十九世紀は非常な文學上に盛況を呈して居

る、前に述べたやうな詩を以て先づ序開きをした、十九世紀の英吉利文學は非常な燦爛たる効果を呈して居る、これが何より、證據であらうと思ふが「マコーレー」の此説の間違て居る事は一寸考へて見れば分る事です。成程所謂昔の人の有つたやうな想像とか感情とか云ふものはなくなるか知れないけれども併し世の中はさういふ風な狭いものではない、非常に廣いものである、無限なものであらうと思ふ、それで昔の人で在て見ると云ふと先刻御話しました「ミルトン」の様な人間の運命と云ふやうなことを詠つたのが詩であると斯う思はれて居るしそれから又さういふのが面白かつ

たでせうけれども、段々世の中が進むに従つてそんな歌ばかりが面白くない極く小さな詰らないことさへも興味を惹くことになつて來た、大きいとか小さいとか云ふことはその形の大小に依らないことである、例へば科學者が小さなものを研究してさうして大發見をする、「ダーウキン」が蚯蚓を研究するに三十年掛つたと云ふ、是は極めて小事であるけれども併し見やうに依ては非常な大事である、さういふやうな工合に此文學に於ても必しも大きなものが詩なり小説なり或は戯曲なりの題目とすべきものではなからうと思ふ、段々世の中が進み智識が進むと吾々の考が精密になつて往く、

さうなると細かい處に想像が這入つて往く、小さい所に這入つて往けば小さい處に無限なる材料があるだらう、例へて言へば斯うしてお互ひが話をして居ることも或は見やうに依つては非常な面白い詩になるかも知れない。非常な面白い研究の題目になるかも知れない。さういふ風に考へれば詩の材料とか又吾々の想像は何處までも働かされるもので限のないものだらうと思ひます。さういふやうな考が私の思ふには所謂「ナチュラルリズム」一面だらうと思ふ。所謂自然主義の一面であらうと思ふ。詰り吾々の遣つて居る、一場の平凡なことが見やうに依つては立派な詩になり立派な小説

にもなる。ならなければならぬ筈である。何故なれば
 實に靈妙なる不思議な考へを有つて居る處の人間であ
 る以上、其することは一言一行必ず深い意味を有つて
 居る、唯進歩しない人には之れを見ることが出来ない
 のみである、其處の野に咲いて居る一つの花が、是れ
 は「ウォルズウォルス」の詩の中にある事であるが其
 處に咲いて居る花でも無限なる意味を有つて居るもの
 と思ふ、神學者が魚の鰭に附いて居る一つの寄生蟲を
 研究する、併しその寄生蟲は非常に大きな宇宙の生物
 上の一種の不思議を現した處の一つの階段である、そ
 れを究めることは非常に興味のあることで非常に大し

た結果があるのである。さういふ風に考へて見れば吾
 々の日常の行ひ、即總て人間がする一々のものが歌であ
 り詩である、さういふ風に考へれば今の「マコーレー」
 の説の全然間違である事も分る。決して材料は減るの
 でなくして又吾々の想像力は決して止まつてしまふも
 のではない、科學が進むと共に文學の天地も廣まるの
 である、其廣い範圍が即ち十九世紀文學の世界である。
 そして斯様いふ細かい文藝上の題目の基を開いたのは
 「バーンス」や又「ウォルズウォルス」一派の詩人だ
 らうと思ふ。それが後に成て續いて往つて其の間には
 後へ退くともあるが、大体に於ては進んで行つて今日

の有様になつて来て居る。それで今日文壇で言ふ自然主義と云ふやうなことはモウ疾く十九世紀の初めに起つて居る、モウ一步進めば十八世紀の終りから既に出て来て居るのでせうが、先づ十九世紀の初めに於て斯ういふ工合に明瞭になつて来た。それが斯ういふ人の初めた方法或は態度を十分に何處までも論理的に推詰めて言つた結果が今日言ふやうな自然主義になつて来て居るのだらうと思ひます。是れが先づ十九世紀の文學の大體を總括したものである。さういふ風に進みますからして文學は非常な多方面になつて来た。何れの方面にまでも材料は豊富である、詰り無限である、無

限であるからして文學者が各々自分の才能を發揮する方面が廣い。總ての方面に發揮して其結果は十九世紀の立派な英文學を現はした譯である。

湖派詩人

それを先づ此詩人から行て大體を御話しかけたのです。一寸此處にモウ少し詩人の名を加へて置ます、「ウオルズオオルス」と一緒に「コーンツヂ」と云ふ人が有た此外「チルソン」の傳を書た「ロバート、サウジー」と云ふ人がある、斯な人が一緒になつて詩の一派を作た、之を「レーク、スクール」(湖派)と稱してありま

す、夫は「ウォルズウォルス」が頭に爲て英吉利の倫敦よりは少し西北の方の湖水の澤山ある處に詩社を組んでさうして自分一派の詩を作つて楽しんで居つたので、是等の人を稱して湖派と云ふのです。

キイツ

夫から尙ほモウ一人「キイツ」と云ふ人を挙げなければならぬ、夫は非常な美しい思想を持つて居た薄命な詩人であつた。これは自然派でもなく理想派でもなく希臘思想の影響を受けた人でした。是等が當時の詩人の主なるものでありませう。今度は小説であります、

小説には前の「フィールディング」とか或は「リチャードソン」より後にイロ／＼なる小説家が出て來ましたけれども此十九世紀の初めに大物が現れて居る

スコット

即ち「スコット」です、之れが即例の「ローマンチズム」の隊長です、西洋では此「スコット」と云ふ人を大變持上げて居ります、實際「スコット」は大家に違ひないでせうが併し「スコット」の「ローマンチズム」は普通のと異て居る。「スコット」は時勢にも反抗した人でなし、小説の材料に於てもさう變つたと

をした譯ではない。唯「スコット」は歴史小説を完成した點が其長所で、今迄の人がやらなかつた歴史の方面に心を向けた。其意味に於てローマンチズムの大家と云はれるのです。何故かと云ふとローマンチズムの意味が現代の時勢が悪いとか兎に角古へに戻さなければならぬとかさういふやうな風であつたものですから、詰り現在の時代でなくして昔の歴史に逃げて題目を歴史に取つたといふ所がローマンチズムの勇將として考へられたのでせう。併し「スコット」は外人のやうに小説を革新するとか新しい思想を鼓吹するとか云ふ様なとは少しも無つたらしい。此「スコット」

の小説の話をしたならば限りないことでありますからして別に言ひませぬが、兎に角マア歴史小説としては非常な大家である。さうして此人の小説はどういふ體であるか吾々には分らないですが非常に尊重されて歐羅巴の各國で翻譯され何處へ往つても持囃されて居る。さうして同時にローマンチズムの代表者のやうに言はれて居る、是れはどういふ理由があつてか知らぬですが兎に角大家であると云ふことだけは明瞭であります。次にモウ少し變つた美文家を擧げて置きます。第一は「ド、クインシー」です。

ド、クインシー

此人は名高い「ラビヤム、イーター」(阿片を食ふ人)を書いた人です、此「ラビヤム、イーター」と云ふ題を付けたのは自分の懺悔と云つても宜いのでせうが、自分が阿片を好んで食つた其結果非常にイロ／＼な苦痛をして其爲めに頭が亂れて、普通の人なれば病氣になるといふ處ですが此の人にはそれが面白い變つた結果を生じて居る。即ちそれがために不思議な妙な空想が頭に浮ぶその事を書いたものですが半は自傳です。また阿片を飲まぬ少年若くは青年時代の記事も大變面白く

書いてある、此人はそれが名高くてそれで以て世の中に知られて居りますけれども、大變な學者で又非常な名作家である、散文若くは論文に於ては或は第一流かも知らぬ、英吉利文學中の第一流に位するかも知れぬ、哲學に於ても非常に深い思想を持つて居た人である。

ラム

第二には「チャールスラム」です。之も學校などで教科書に使はれて居ります、其名高い作は「エッセー、オブ、エリヤ」之れも自分の見聞した事経験した事を書いたもので自分の傳と云へば言はれぬ事もありませぬ。

ド、クインシーのは夢とか非常な空想を逞しくする者ですけれども是れは正反對で繪にすればキャピ子形の小さい風景畫若くは風俗畫です、天然のものをさう書て居る譯ではないけれども、チョツとした町の一端をキャピ子形の水彩畫に取つたやうな作であつて、例へば自分が長い間會社に雇はれて居つた、それから止めた悪い意味で止められたのではないモウ大分年を取つたから止めたら宜からうと云ふので年金を貰つて止めた、其時の感想を書いてある、或は又自分が初めて社に出た時の心持を書いてある、平凡のことです、それが大變面白く書いてある、教科書にでもなつて居る位です

からして或は諸君は御覽になつたことがあるか知らぬですけれども餘程面白い心持の好い讀み物です、マルで「ド、クインシー」のとは反對ですけれども併し要するに自分のとに關係する自分の見聞を書いて居る處が似て居る、美文家としては此二人を擧げて置いて差支なからうと思ひます、斯んな人が十九世紀の初めに居つた大家です。

それから少し十九世紀に進んで來ると、茲に千八百三十七年と云ふ年がある。

千八百三十七年

此年は記憶すべき年だと思ふ。之は實に先女皇即今の「エドワード陛下」のお母様の「クイン、グイムトリヤ陛下」の即位の日です。此「クイン、グイクトリヤ」の時代が十九世紀の英文學に於て非常なる盛大を來した時代である。此時代に這入つて初めて小説家も非常に出て來るし、詩人も澤山出て來て居るし。イロ／＼な思想上の變動などが出來て來る。餘程面白い時である。それに就て先づ劈頭に出るのは何かと云ふと今度は小説です。十九世紀はマア小説と詩が大變盛んであつた。

ドイツケンス

此年に現はれて一番に言ひたい人は「チャールスディッケンス」である。此人の作に「ピククウィック、ペーバース」と云ふものがある。是は千八百三十七年に出版してゐるのです。三十六年から書いてあつたのですけれども一卷に纏つて出たのが三十七年です。「ディッケンス」と云ふ人は非常に滑稽に富だ人である、一體英吉利の人は非常に眞面目なまた非常に嚴格なる人種である。然るにそれから出で來る處の文學は非常に沈痛なる者であるのですが、どういふ譯かまた甚だ滑

稽の趣味も澤山にある。之まで御話した中にも随分滑稽は在た。前に彼の「フィルディング」の「トム、ジョンズ」を挙げましたが、彼れが既に稍々滑稽の趣味を有つた者である。此「ピックウイック」の前後にも滑稽物が澤山にあつたでありますけれど「ピックウイック」はそれ等を大成した者です。之は日本で言へば例の彌次喜太と云ふか或は滑稽和合人とか七變人と云ふものに當ります。

ピックウイック

その大筋はこんな者です「ピックウイック俱樂部」と

いふのが在まして「ピックウイック氏」を會長とし其處の俱樂部員が恰度和合人だとか七變人とか云ふ様に妙な男の揃ひである。それがイロ／＼な失敗をやるので實に抱腹絶倒するところが澤山ある。尤も彌次喜太のやうな下品などはない、つまり紳士の彌次喜太です。マア和合人位としたら適するかも知ぬです、例へば「ピックウイック」が宿屋で以て間違へて他人の部屋に入つて而かも婦人の部屋に這入り込んで其寢處へ寢て居ると其持主の婦人がやつて來て見ると知らない人が其處に臥て居る。併し始めから其寢て居るのを知つて居れば宜いのですけれども夫を知らずに婦人はお化粧

をして居る。西洋の室には其部屋に化粧をするやうに鏡が立て、ある顔などを洗ふやうになつて居りますから其處へ来てお化粧をして居る。寝て居る者はそれに氣が付いた、併し出ることもならず、居れば遣て来るだらうと云ふので非常に閉口すると云ふやうな事がある。餘程面白く書いてある。さういふ種類のことばかりで何しろ一言一句可笑しいのです、例へば此頃見たやうな風のある日に帽子がコロコロと轉る、兵隊が列を組んで来る。其列に連れて「ピックウイック」といふ男は四斗樽の様な身体をして轉つて往く帽子を追ひ驅るナカナカ取れない、ウカウカすると兵隊に突當ると云ふ、

著者「ヂツケンス」は其處で注意を與へる。そんなとをすれば取れない、斯ういふ様にすれば取れる、と云つて乃ち風に帽子を取られた時にはどういふやうにすれば宜いかと云ふ其方法を書いて居る。さういふ處が頗る滑稽です。さうかと云ふと「ピックウイック」先生が俱樂部員と共に狩に行く、七變人にも和合人にも一番頭の人がありました其男が一番滑稽を演ずるのですが此「ピックウイック」もさうです。夫で今日は狩に往く、狩に往くのは宜いが鐵砲を持って行つては危ない。鐵砲を持たずには往かれないかと「ピックウイック」が言ひ出してイロ／＼な問答がある、それで結局

持つて往くことになるが、鐵砲をあたりまへに擔いで往くといけない何時彈丸が出るか知れない。と大將はまた苦情をいふすつたもんだして到頭鐵砲を逆さまに持つて口を下へ向けて行くことに折合つたと云ふ。それから獵場へ往つても先生勿論鐵砲は撃てはしない、車か何かの上へ寢てしまうのです、處が其處は他家の禁獵地である、禁獵地處ではない他家の庭ですから無論這入るのは悪いのです、それを知らずに這入つて先生寢て仕舞つたのですから皆が置いて往つてしまつた。さうすると其家の持主が其處へ廻はつて來る、見ると非常に肥つた男が寢て居る、餘程變な奴だ、起しても

起きない、それでは一つ辛い目に遭してやらうと云ふので車でがらくと曳かして往來の真中に連れて行つて置いて往つた然るに「ピククウイック」先生夫でも目が覺めなかつたと云ふとがある。そんな失策談ばかりで随分厚い本です、併し滑稽ではあるけれども其中には意味がある。唯の滑稽ではない、矢張世の中を諷したのです、此「ピククウイック、ペーバース」は全編滑稽ですけれども「ヂッケンス」の書いた物には何れも滑稽の趣が澤山あるのです。併し此人自らは非常な眞面目な人で又非常なる苦學とでも言ひませうか大層難難を経て大家になつた、夫ですから其書いて居る小説

は皆貧民を主として居るのです。下等の民に同情を寄せた者です。さうして下等の民の爲めに氣焔を吐き同時に世界中の人に對して下等の民に同情を寄せます様な考へを有つて筆を付けたのです。夫ですからさういふ點で「ヂッケンス」の小説は餘り道德が多過ぎると云ふ風な批難がある。道德と言て勸善懲惡ではないけれども、弱者に同情を表したと云ふのが餘り多過ぎるのである。併し其小説は皆非常に立派な者です、皆一流の者であります、その中にて主なのを挙げれば是は自分の自傳だと云ふことであるが「デビッド、コッパ―フィールド」「ドンペー、エンド、ン」 「オリバー

ツイスト」其他十數種で此最後の本は前に翻案などが出來て居つた、その話は矢張日本で言へば掬摸ですね、善良なる小供が掬摸の仲間に入つて育つて掬摸になる、掬摸になつて後に本統の親が分つて親の手に歸ると云ふやうな小説ですが、大變面白いのみならず掬摸仲間のことが非常に詳しく書いてある。彼國でも日本でも同じでせうが一度ア、いふ仲間に入るとその仲間に聯絡が出來て居つて出られないですな、さういふ仲間から出るとエライ目に遇うと云ふのでどうしても出られないでその仲に引き入れられたものは可哀想だ、少年は漸くしまひに救ひ出さるゝことになつて居

りますが此の本を見ると彼國の揣摩のことが能く分る
です、マア其外にも澤山ありますけれどもさう名計り
書いても詰りませぬから書ませぬが此「ヂツケンス」
と云ふ人は今言ふ通り非常な苦學と言へば苦學ですが
非常な艱難をして大家になつた人ですから、教育は一
向に受けて居ない僅かに小學校へ往つた位であります。
後には近所の使ひ歩きをして居つたり、段々大きくな
つては此「デビットコッパーフールド」に書いてあ
るを以て見ると酒屋か何かの小僧見たやうになつて
居ります、酒屋の小僧見たいで酒の壘を寒い時に冷た
い水で洗つて居る、ア、いふやうなことをやつた時の

ことが大變可哀想に書いてあります、それから段々に
良くなつて非常な勉強をしたのです、夫から努力をし
て議會へ這入る。議會へ這入つたのは速記者としてい
あつたがやがて議會のことなどを探訪して通信をする
やうなことをやつた。それから新聞の探訪になるそれ
が筆を執る初めです、さうして段々修業をして居る中
に自分の名を匿して新聞に投書をする、投書してそれ
を集めたものが「スケッチス、バイ、ボズ」といふ一
巻の書物になつて居るこれが初めての作です。即ちそ
れが處女作です、之からして評判になり次に「ビック
ウイックペーパーズ」で一躍して大家になり、それか

ら後は立派なる生活をしたのです。初めて自分の書いたものが新聞に出た時は嬉かつたと云ふ、誰しもさうであるでせう、雑誌に出た時は嬉しくつて所謂雀躍こぼどして梯子段を上つたり降りたりしたと書いてあります、如何にも尤らしい話であります。此「チャールズデッケンス」が先づ「ヴィクトリヤ」女王の朝に於ける大小説家です。

サツカレー

此人と竝んで「ウキリアム、サツカレー」と云ふ人が居る。私は今「デッケンス」の事を第一と言ひました

と記憶して居ますけれども此人も亦第一と云つて差支ない小説家です。殊に此人は文章に於て秀れて居ます。其點は「デッケンス」に勝て居りませう、夫から此人も前のは異つた意味ではありますが多少滑稽の趣を有つて居るです。此人の傑作は「ヴァニチー、フエヤ」と云ふのでこれ又大變面白い小説です、そして此人は「デッケンス」と反對で平民でなくして貴族の方へ同情を有つて居る。

前にも申した通り「サツカレー」と云ふ人の思想は「デッケンス」と正反對で「デッケンス」は下等の人民の爲に氣焔を吐いた、社會を改良しやうとした、極端に

云へば社會主義と云ふとにでもなりませうけれども、そこ迄に至たのではないのですが人民をどうか良くしたいと云ふ積りであつた、さういふ目的で小説を書いたのでありますが「サッカー」に至つては世の中をどうかしやうとか改良をしやうとか云ふやうな考へは一つもない、それですから却て世の真相は能く見えたかも知れない。夫で取扱つた處の問題は「ヂッケンス」の下層社會を取つたのに對して上流社會を寫した者である。「サッカー」の物は多くは皆上流を寫したのであります、「ヴァニチー、フエーヤ」も其一つで上流社會のとを書たのです。「ヴァニチー、フエーヤ」と云

ふのは譯すれば「虛榮市」と云ふのです、虛榮の市と云ふのは詰り人間が皆虛榮を追ひ求めて騒いで居ると云ふことの意味でありませう。デ此話は大分忘れて居りますがそれでも御話しては長くなりますが、唯一言言ひませう。其話は女學校の卒業が濟んでさうして女學生が家に歸る處を以て始まつて居るのです、其女學生の一人が自分の學友の家に遊びに往く、其學友は立派な貴族ではなかつたけれども大變金のある資産家であつたのです。其處へ遊びに往くのです、所が其遊びに往く女學生が尋常な女ではないので世の中に立つて縦横に切りまくらうと云ふ野心を有つて居る女であつ

た。それが今此家庭に這入り込んでから切つて廻はず、そののみならず永く居る内に親類縁家までも搔廻はして歩く此の女の名は文學史上に非常に名高いので「レベツカシヤープ」と云ふ、夫を詰めて「ベツキ、シヤープ」と云ふて居ります、日本で言へば色男を丹次郎と云ふやうな譯でさういふ風の名を取つて殆ど代名詞にしてしまつて人物を評することが彼國では普通です、則ち「ベツキ、シヤープ」と云ふ名は今述べたやうな種類の女の代名詞になつて居る位に名高いものです。それで此女に大勢男が欺される。その際に起る男女の關係から顯はれて來る人物の性格などが中々面白

く讀まれます。一言にして此作を言へば世相を實寫したのです。併し又「ヂッケンス」と同じと云ふところもある、と云ふのは世の中を識るとか世の中を諷するといふ點が似て居ます。此の小説にも諷刺と云ふやうなことは十分にある。虚榮市と云ふ題がすでに諷刺です、世の中のもの皆虚榮を追つて歩いて居るのである、世の中は馬鹿なものである、簡單に言へばこの本はさういふ風な工合に世の中を諷して居る、其點に於ては矢張社會を眼中に置いて居ると云ふことが言へるのです、此頃の小説は大分違つて來て居りますけれども一體英吉利の小説に限らず總て文學は——主に小説

を言ひますが始終何かさういふ風な目的を有つて居ります、或意味から言へば宜くないことである所謂さういふのは目的小説になるのです、目的小説は「ノベル、オプ、パース」¹と云ひますが併し是れも狭く言へば悪いですけれども廣く言へば差支ないだらうと思ふ。と云ふのは世の中の實相を寫してさういふ世の中を良くしたいと云ふ、斯ういふ廣い意味で言へば、それはどうもさう答めることではない、近頃では小説には目的があつては往かぬと言つてそれをやかましく攻撃する。それは全くさうに違ひない、例へば奴隷廢止の爲に小説を書いた、社會主義の爲に小説を書いたと云ふこと

になると、それは立派な小説と云ふものが外の者の奴隷になることになりまますから、それは往けない。併し同時に小説には大きな意味の目的がなければならぬと思ひます。それは小説全體に就て云ふ譯ですが英吉利の小説には大きな目的で書いたのもあり又小さな目的で書いたのもあります「ヴァニチーフーエヤ」²には目的がある。併しそれは小さい直接の目的ではない、一言に言へば道徳があるのです。一體道徳といふ事は今の文藝批評から言へば人から好かれない——好かれないのみならず、小説としては悪いとせられて居る。併しながら又考へやうに依つてはどんなものだつて道徳

です吾々の存在して居るのは道德的存在であるから若し道德が吾々に無れば存在が恐らく出来ない、さうなると大變やかましくなるけれども、先づさうであらうと思ふ。只小説に於ける道德はその大小若くは直接の目的と左様でないのとの如何を問ふべきであらうと思ふ。大層話が脇道に這入つたが「サッカー」の小説も見様に依ては多少諷刺的の目的を有して居る。兎に角「ドイツケンス」と「サッカー」の二人は先づ英吉利の小説家中の第一流です、且つ茲に注意すべきことは此二人が近世の小説の開山、序開きと言つても宜い位な處がある事です。と云ふのは世間普通の世の中の

事柄普通の事柄と云ふては餘り言ひ様が悪いですけれども、詰り尋常一樣の世の中の状態を取つてさうして之を小説にする、斯ういふ處が此二人の人の上に就て特色とすべき處である。さういふとは何んでもないやうなことのやうでありますけれども當時では大變なことであつた、昔であつて見ると何か小説には大變なことがなければならぬと云ふ考へで居つた。どうも關羽が青龍刀でも持つて出なければ話にならぬとか或は何万騎の兵隊を連れて戦をした、ところが忽ち五六十騎に打敗かされてしまつた、といふ太平記流のものでなければ小説ではないと思つた。それは日本だつてさう

だらうと思ふ、處が今日ではさうではなく極く當り前な學校の生徒の生立おきたち、それから世の中に出て往くと云ふやうなことを書いた、で夫を小説と呼んで居る。是れは非常な變化である。之を簡單に言へば「ヂッケンス」も「サツカレー」も「リアリスチック」で在つたと云ふとであります、即ち寫實主義であつたのです。さういふことを論じた人はあるかないか知りませぬけれども私は確かにさう思ふ、夫で此「ヂッケンス」や「サツカレー」の開た寫實主義が矢張佛蘭西に行て大變に勢力を及ぼしたと思ひます、今日では「ゾラ」とか「モーパッサン」とか云ふ人は自然主義とか言はれて居り

ますが其本は道德をやかましく言つた英吉利にあつた様に思ふ、それ計りではない、實際其一部分は英吉利から出で居る。即ち此二人に依つてさういふ新方面が開かれたのである。其勢力が向ふ岸の佛蘭西に及んだのであります、勿論佛蘭西にも「バルサル」と云ふ人が出て新しい世の中の見方をしましたから全く英吉利からの勢力とは言へませぬけれども、確に一部分は此方から行つて居る。夫は唯空に言つては分らぬが、其證據がある。則ち佛蘭西に「ドーデー」と云ふ人があります之は「ゾラ」等と并んで寫實主義の人でしたが確に此人の作の上に「ヂッケンス」の勢力は見えて居る。

夫は吾々が此の兩家の者を讀んで分る事です。所が話
 が又少し横に入る様であるが、其佛蘭西に行つて花の
 咲いた自然主義若しくは寫實主義が又英吉利に影響を
 及ぼして居る。それは後に御話致しますが現代に於て
 英吉利に「トーマスハーデー」と云ふ人があります此
 人等が即ち佛蘭西の自然主義から「インフルエンス」
 を受けた人である。

此處で御話を切りまして小説の系統を申します、初に
 「スコット」が歴史小説を作たと云ふと言ひましたが
 彼の「スコット」から又別に歴史小説の流が出来た、
 一寸斷て置きますが「デッケンス」は千八百三十七年

から千八百六十年代迄の作物を出したので、同時に
 千八百三十年から五十年頃の間矢張「スコット」の
 流を汲んだ歴史小説が出来て居る。

リットン

夫は「リットン」及「キングスレー」と云ふ人である。
 此「リットン」と云ふ人は御承知か知りませぬが昔は
 能く流行つたものです。昔流の小説として——昔流の
 小説と云つては分らぬですけども、事件などを重ん
 ずる小説として珍重されました、日本に其翻譯もあり
 ます、妙な昔流な翻譯で迎も眞實の意味の翻譯とは言

はれない、其題を云へば花柳春話など、云ふ古臭い名です。ア、言ふ風な名で一二冊譯されてゐる。さういふ風に譯されてあるからして日本では今日では餘程下らない者と思はれて居るやうですけれどもナカ／＼さうではない。餘程面白い歴史小説です、此の人の作は「ゼ、ラスト、デー、オブ、ボンベー」「ゼ、ラスト、オブ、パロンス」斯ういふやうなものが宜いのです、是は非常に面白い、特に「ゼ、ラスト、デー、オブ、ボンベー」は名高いものです。可笑しいことには近頃これを芝居でやつた事があります。桑港と云ふ題を付けて桑港の地震を當て込んだのです。アレでは到底駄目

で原文の心持を出せぬと思ひますがヴェスビヤス山の噴火が「ボンベー」の最後の日になる、あの噴火で悉皆「ボンベー」の市が埋まるので、悲劇の最期になることでありまして原作は實際芝居としても非常に面白いのです。「ボンベー」當時の非常な榮華非常な贅澤を極めた時代と、それから其當時段々に勢力を起し始めた、「クリスチアン」との對照、其間に顯はれる可愛らしい少女や美人、勇士などと云ふものがよく配合されて非常に面白い小説であるが、同時に面白い芝居になつて居る。

キングスレー

夫から次に申上げるのは「キングスレー」と云ふ人です。是は坊さんでありますけれど大分小説を書いた歴史小説も書いた。即ち「ハイベシヤ」と云ふのがあります。「ウエストワード、ホー」と云ふのも有ります。是は「エリザベス」時代の歴史小説です。又此の「ハイベシヤ」の方は注意すべき物である。矢張「ラスト、デース、オブ、ボンベール」と同じやうな昔の古い物語りです。で「ハイベシヤ」と云ふのは非常な美人であつた、哲學者の名です。そして紀元第五世紀の「アレ

キサンドリヤ」に居た人です。當時の「アレキサンドリヤ」は大した處でして、東西の文化と東西の思想とそれから其東西の富を集中した非常な所です。希臘の文明なり希臘の思想なりは此處に移された。それで此處に行はれた哲學は何かと云ふと「新プレトール」派の哲學でした。「ハイベシヤ」は則ちその先生で公衆の前に立つてその哲學の講義をする、其哲學は知行合一と云ふやうなもので直さま道德の教へになる、即ち哲學を學びそれを直ぐに行ふと云ふことになる。「ハイベシヤ」は公會の席に於て始終夫を講義して居る、其處へ大勢人が集まつて来る、細かい話になりますと時間を

取りますけれども、モ少しこのお話をついけると其「アレキサンドリヤ」にイロ／＼な者が集まつて居る、「クリスチャン」や「デユウ」や（猶太教信者）又それから今の哲學の宗徒則ち「チオプラトニス」それから又イロ／＼な人種が集まつて居る。羅馬人、希臘人、埃及人それから、「ゴツス」人は等がゴチャマセになる、そうしてそれ等の人種と宗教とが各々別々になり其處で争が起る。非常に揉めるのです。其間には政治家で以て野心を有て羅馬の手を離れ、さうして「アレキサンドリヤ」を獨立さして自ら「アレキサンドリヤ」の主權者にならうと云ふ者も居り、それから一方には坊

主がナカ／＼野心があつて之も國政を取つてさうして「アレキサンドリヤ」を自分の物にしてしまはうと云ふやうな考を有つて居る。猶太人は猶太人でナカ／＼隠險なる手段を弄して「クリスチャン」や何かを憎んで苦しめて居る。比較的哲學者は超然として居る、さうして其大將が「ハイベシヤ」です、併し乍ら矢張哲學者でも多少人間の弱點を有つて居る、それで「ハイベシヤ」も少し野心を挑撥させられるのです、矢張自分の勢力を「アレキサンドリヤ」に於て張らうと云ふ様な考を外から注込まれるのです。それが原因で此の美しくしき哲學者が失敗するのです、則ち到頭「ハイベシ

「ヤ」は非常な惨酷な死に様をする、其最後は悲惨でありますが此人種と宗教のごつちやかへして居る處は非常に面白い、如何にも其當時の「アレキサンドリヤ」が眼の前に見へるやうに書いてある、さうして其處に「ゴス」人種が特別に出て居る。是れは近世の歐羅巴を拵へた人種です、併し當時は此人種が即ち蠻族なので是が實に野蠻なものである。此野蠻人が文明の「アレキサンドリヤ」に這入つて來又埃及へ這入つて來て、非常な蠻勇を奮ふのですが矢張そんな野蠻の中に今日の文明の要素を持つて居る様に小説には書てある。實際さうなんでせう。その文明の要素といふのは一種の

徳義を有て居る事です。或は「ゴス」人が非常な野蠻人であり乍らどうも抜くべからざる元氣と勝れた所がある云ふ様な處もある。さういふ風に是が所謂歴史小説であります、それは歴史小説でありますけれども併し大した作ではない、エライことはエライけれども此人は逆も小説家として「ヂッケンス」や「サツカレ」と並ぶ人ではないのです、所が特別に斯んなことを私が長く言ひましたのは是れには理由があるので、是れは歴史小説ではありませんけれども、其當時の事を書いたものであるからです、そこで小説の話を切りまして其話に移りたい。

「オックスフォード、ムーブメント」

その當時の事といふのは斯ういふことであつたのです、矢張千八百三十年代に早く起つた「オックスフォード、ムーブメント」といふものがある。是れは宗教の運動です、此「オックスフォード、ムーブメント」は「クリスチャン」が段々平民主義になつて、極く宗教の尊い所をなくして無暗に社會的に運動すると云ふやうな傾きになつて來た、極端に言つて見れば救世軍と云ふやうな形を宗教が取つて來たのである、尤も當時救世軍があつたわけではないですが、先づ社會的に宗教が

なつて來たのです。是は怪しからぬとであると云ふ考を「オックスフォード」大學の學者連が云ひ出した。宗教と云ふものはアンなものになるべきものではないと云ふので頻りに是れを筆の上で攻撃し出した、それが大變な勢力になつた、それを稱して「オックスフォード、ムーブメント」と云ふのです。所が此「オックスフォード、ムーブメント」は啻に感情的に意味もなく當時の宗教に反對したのではない、宗教と云ふものは決してあゝ云ふ風に極く平凡化するのではない、高尚なものではなければならぬと云ふので、どうしても今日の宗教は間違つて居る夫で眞の宗教は昔の羅馬教であ

ると云ひ、さういふ主張をし出した。

ニユーマン

其主張者の總大將は「ニユーマン」と云ふ人で此人が羅馬教即ち耶蘇舊教の信者になつた事は宗教史上の一大事件としてある。此の人は實に宗教家たるのみならず又文學上にも名高ひ人で「ニユーマン」の散文と云へば立派な物です。それに對して此「キングスレー」等はまた反對の意見を出した、彼等の言ふには、さういふとは決してないものである、宗教は社會的になるべきものであると云ふので此先生は「クリスチャン、ソ

ーシャル、ムーブメント」と云ふものを拵へた、即ち基督的社會運動と云ふ者を起した、それでキングスレーはその第一としてオックスフォード運動の羅馬教主義に反對ですからしてそれを攻撃する爲に之れを彼の「ハイベシア」といふ小説に書いた、要するに羅馬を頭に載いた「クリスチャアン」は間違て居ると云ふ事を明かにするために歴山府の宗教にこと寄せて其羅馬教の坊主の行が治まらぬとか或は慾張つて居るとか野心を持つて居るとか有らゆる悪いとを書いたのであります、夫からもう一つ「キングスレー」がこの小説を書いた目的がある、それは希臘思想と云ふものに反對し

た考へを此の内に顯はして居る事です。希臘思想と云ふものは英語で「ヘレニズム」と云ふ。是れはどういふことであるかと云ふと多分諸君は御承知でせうけれども歐羅巴の文明を組織するのに二種の思想がある。

希臘思想。ヘブリユー思想

一はヘブリユー即ち猶太から來た宗教的潮流ともう一つは希臘思想、希臘から出た處の文學藝術、若くは哲學思想此二つが始終並んで來て歐羅巴の文明をなして居る、大摺みの話ですが始終此の二つが並んで來て居る、さて今いふ此「クリスチアン」の主義は何かと云

ふと道德である、さうして形は宗教として現はれて居る、「ヘレニズム」の方はさうでない、是れは藝術主義で矢張藝術を尊ぶ、詰りは文學を重んずると云ふことになる。それからもう一步進んでそれが實際の生活に現れて來るとどうなるかと云ふにそれは一種の樂天主義見たやうになりませう、世の中を面白く愉快に過す、美的生活と云ふやうなものになるのですね、美的生活などといふ事は矢張「ヘレニズム」から出て來た考であらうと思ひます、然るに「クリスチアン」の方の考は出來るだけ自分の身を苦しめ、世の中は悪いものである、自分等は非常に行を慎まなければならぬものであ

るとかう云ふやうな考を主張して極端に云へば難行苦行して自分の徳を修めると云ふことになります。希臘思想から言へばそれとは反對で愉快な面白いことは何んでもやるが宜からう、飲食の樂も歌舞の快樂も良からうといふのです。夫ですから此の希臘思想と基督教主義とは到底相容れる筈がない、此二つが互に相待つて竝んで世の中を組織して居る。所が此「キングスレー」の時分になつて段々に「ヘレニズム」の勢力が殖て來た、少くとも「キングスレー」は左様考へた「クリスチアン」が一方にアンな風になつて來たと同時に「ヘレニズム」の勢力が段々に進んで來た、則ち文藝の

上に希臘の思想は著く顯はれて來たといふのです、夫で「キングスレー」は之は往かぬと云ふ考を有つた。そこで此の小説に於て希臘の新プラトニ派を惡く云つた、併し直接に惡くは云はない、決して「ハイペシヤ」の人格と云ひ、人物と云ひ、哲學と云ひ、總て立派なものであるからそれを惡く云つては居らないけれども、併し尙ほ人心の要求はそんなものでは足りない、もう一歩進んだ宗教が要るぞと云ふとを暗に示して希臘の思想を排斥して居る。それはどう云ふ所にあるかと云ふと「ハイペシヤ」が殺される前に非常に苦悶くもんしんで居る所がある、一室に籠つて、髪を亂して、泣いて居る

所がある、さうするとそこに猶太人の「ミリヤム」と云ふ婆さんがある、是れは妖婆です、巫女とでも云ふのでせう、始終不思議な呪をするとか魔法を使ふと云ふやうなとをして人を欺して居る、何人も其勢力にはどうしても服従しなければならぬ、一種の「チャーム」を有つて居る婆さんである、其婆さんが「ハイベシア」の處へ来る、来て「ハイベシア」に御前どうして苦んで居るのかと云つて慰める様な嘲るやうな事をいふ夫に對して「ハイベシヤ」は哲學でも自分を助けることが出来ない、安心がなくなつたから之に呪をして貰ふことになる、もう哲學が呪ひをして貰ふやうになつたらお

しまひです、此「ハイベシヤ」の立場がなく成てしまふ、同時に市街に僧侶の一揆が起て「ハイベシヤ」を殺してしまふのです、斯様いふ工合で「ハイベシア」は實際立派な人間であるけれども哲學のみでは未だ安心を與へる事は出来ぬ。所謂希臘思想ばかりでは世の中は立行かぬぞと云ふとを云ふが爲に「キングスレー」が之を書いたのであります、さう云ふ見方からして大變此小説は面白い小説である、此「ラストデース、オプ、ボンベ」も「ハイベシヤ」も私は傑作だと思ひます同時に面白く讀まれる。さて歴史小説はさういふ有様で進んで來たのですが此處で一吋此小説の事を終

つて置きます、また十九世紀の途中にありますけれども、もそこで切つて置きます、切つて置くと云ふのは止めてしまふと云ふのではない、此間に外のことを御話しなければならぬのです。

それで今度は詩のことに就いて一寸御話をして置きます、詩は前に「バイロン」と「シエレー」と「キイツ」のものを舉げて置いた、アレから續いて行くのですが、夫から直ぐに「テニスン」に行つて宜いでせう、昨日「キイツ」のとお話して一方に湖派詩人の「ウォルズワース」があつて一方に「バイロン」一流の盛な詩が行れた、此間に立て別に異彩を放つて居たのが「キイツ」

てあると申しました、此「キイツ」などの詩が例の希臘思想を現して居る、大變綺麗で又藝術的です、「バイロン」の様な非常に勢の宜い思想を述べるでもなく又一種の悲しみとか何んとかいふ風なことを述べるのでもない、そんな趣きも勿論ありはしますけれどもそればかりでなくしてそれ等の考を統一するに殆ど疵のないと云ふやうな如何にも圓満なる考を以てして居るやうなのが即ち「キイツ」の詩である、詰り世の中を藝術的に見て居る。

テニスン

「テニスン」は決して「キイツ」と同じではありませぬが其「キイツ」流の趣は「テニスン」に於て現て來た、「テニスン」は御承知の通り「ウォルズウォルス」に續いて勅選詩宗になつた人で、先づ當時の時代を代表して居る處の詩人であります、又「テニスン」に於ては總てのものが調和して居る、今の「キイツ」流の趣があるし、夫から一方には「キイツ」に於ては道德とか宗教的觀念は少ないが「テニスン」には夫がある、前に「ヘレニズム」のことを御話した時宗教思想と希臘思想

とが伴ふて來たと云ふと言ひましたが之は何にでも現はれて居る、唯一方が多かつたり少なかつたりすると云ふ事は有ますが思想界の人は何人も此の兩勢力には影響されて居ます。「キングスレー」の如きは正しく「クリスチアン」思想が非常に多くあつた人であると言て宜いでせう。之に反して「キイツ」などは「ヘレニズム」の方です全く希臘思想の方から出て來た人と言て宜い然るに此兩側を「テニスン」が適宜に持て居る、さう云ふ點に於て「テニスン」は此當時の時代を能く現はした人で有ます。其傑作は澤山有ますからして一々言ひませぬが「アーサー」王の物語の詩などは其第

一に擧げべき者でせう。此詩は確か「テニスン」に十
 二あると思ひます、是は大變面白い詩であります、一
 番初めに御話しなければならなかつたか知りませぬが、
 「アーサー」の傳は英吉利の文學に大關係のある物です、
 「アーサー」と云ふのは何處からか英吉利に来て國內を
 征定し何處ともなく去つてしまつたといふ物語上の英
 雄ですがさて此「アーサー」が頭で大勢の武士がその
 下に居る、それは「ラウンドテーブル」(圓卓)を圍む
 の武士と云つて皆甲乙上下の差別の全くないと云ふこ
 とです、其武士が各々種々な武勇をあらはす。王を始
 めその武士の各々列傳見たやうな者が一個々々の詩に

成て居るのです。本統の物語は一つの續いた話に成て
 居ますけれども「テニスン」が其れを分けて十二の人
 物に各の事蹟を附けて詩にして居る、此中には大變面
 白い話や憐れな話が澤山あります、なほ此物語の基は
 斯ういふ本である、即ち古い「マローリース」といふ
 人の書た「モルト、ダ、アーサー」と云ふのである「テ
 ニスン」は此の物語に寄せてイロ／＼な自分の思想或
 は自分の哲學なり自分の宗教なりを總て入れて居ると
 云ふても差支ないでせう。

ブラウニング

次に「テニスン」と並んで「ブラウニング」と云ふ人がある、是は非常に宗教的・道德的な詩人である、有名なむづかしい詩人で一寸普通には分らぬと言はれて居る詩人です、「ソルデルロー」と云ふ名高い詩がある、それを評して「ソルデルロー」は分らない詩だ、分るのは初めの一句と終りの一句だけだ、中は悉皆分らぬ、而も初めと終りの一句は嘘であると云つた人がある、それでは一つも採る處がないといふことに歸着するのですが、それ程でもないでせう、が兎に角それ程の評

を受ける位分らないむづかしい詩である、それから少し降つて詩の方にも亦一種の運動が始つた、是れは御承知でもありませんが「ブレラファエライト」と云ふのです、則ち「ラファエル前派」と云ふのであります。是も一種の「ローマンチズム」です、矢張詩と云ふものは中世に歸らなければならぬ、「ラファエル」以前の有様に戻らなければならぬといふ主張を以て詩を作つたのですが、かういふ考は詩ばかりではない、繪畫に非常に關係のある事で「ラファエル」の繪は往かぬ、「ラファエル」の前の繪でなければ往かぬ、「ラファエル」の繪はモウ十分に行つてしまつたからそれより發達の

しやうがない、今日の手本とするのは「ラファエル」以前のもの、則ち是れから後盛んにならんとする處のものを模範にしなければならぬ、と云ふことを言ひ出したのですが、矢張詩に於ても同様に總ての考が「ラファエル」以前に往かなければならぬ、と云ふことを言ひ出しました。

ロセツテイ

「ダンテ、ガブツェル、ロセツテイ」は書に於ても詩に於ても此派の尤も名高い人です。夫から又詩に於ては一方に「マシユー、アーノルド」といふ大家が居る、「ア

ーノルド」は名高い批評家であります。批評と共に詩が大變好いのです、所謂此人の如きは矢張希臘思想と「クリスチャン」の思想と餘程好い工合に調和した人で有ませうけれ共「テニスン」と違ふ處は此人には不安の念がある、「テニスン」は或る處まで各種の思想を調和して事をやつて居るが、「アーノルド」はさうでない調和してもまだ不安であると云ふ心を有つて居る、どうも自分は仕方がないから此處に居るけれども、モウ少し安全な處に往かなければならぬと云ふ様な始終さう云ふ心の状態である、心の状態は兎に角詩に現はれた處がさうである、「テニスン」の方は自分の立場は

此處であると、ハツキリ書いてありますが「アーノルド」は始終疑惑を有て居る、其疑惑を有て居る處が詩として宜いのでせう、私一個としては「アーノルド」の詩の方が面白いと思ふ。「アーノルド」以下澤山に詩人があります、何れも一流の大家ですが先づ名計り挙げますと「スインバートン」が第一に居る、是は今居る人です、「ウキリヤムモリス」と云ふ様な人も居ります、「キツプリング」も現代第一の詩人です、先づ詩のことは甚だ簡略でありますけれども時がありませぬ爲に此處で切つて置きます。

評論

更に評論の事を御話して置きます、評論と云ふものは矢張十九世紀に起つたもので、マア其前からもありましたが、特に盛んになつたのは十九世紀である、それは何から起つて來たかと云ふと政治から起つて來た。

雜誌

御承知の通りに英吉利の政治界は保守黨と自由黨と二つ竝んである、其黨派が各々雜誌を發行してさうして

評論をし合つた、それが所謂評論の元であります、「ク
オタリー、レビウ」「エディンバラ、レビウ」などイ
ロ／＼な「レビウ」(評論)が澤山出来て来た、皆政治
評論の雑誌であつた、それで昨日も御話した、「ドクニ
シイ」とか「ラム」とかはそんな文藝方面の寄書家で
あつた、併しさういふ寄書で最も名のあつたのは例の
「マコーレー」です。

マコーレー

今日では學校で「マコーレー」の書いた者を使はぬ様
になりましたが以前には使つた「ウヲレンヘスチング

ス」とか「クライブ」とか「フレデリック、ゼ、クレ
イト」とか云ふ者が皆使はれました、それは何かと云
ふと「マコーレー」が雑誌に寄書した物です、夫が詰
り一冊に纏つてア、云ふやうな本になつたのです、詰
りア、云ふやうな者が出るのですから雑誌も餘程立派
なものである。「クオタリー、レビウ」「エディンバラ
レビウ」の此二つの雑誌などは全く立派な本でありま
す、さういふ雑誌があつて夫が元政治の機關であつた、
今日でも政治の意味を有つて居りますけれども、今日
では昔程ではない始めは大抵政治論のみでしたが後に
は「ミル」の如き人が筆を執つて政治文藝兩方に亘る様

になつて來た「マコーレー」の文なり「ミル」の文なりは必ずしも文藝批評の初めとは言へませぬけれども文藝批評が一般に見られるやうになつた起りです。「マコーレー」と竝んで著名なのは例の「カーライル」であります。

カーライル

「マコーレー」は何が傑作であるかと云ふとは言ひ兼ねますが餘り大作と云ふ者が無い、無論英國史は宜い者でありませうが是れは文藝批評ではない、歴史として宜いのでせう、文藝上の評論としては何が宜いか一寸

判定に苦むですが、皆大したものではないと言ふても宜いかも知れぬ、同じ様な物であるかも知れぬ、然るに「カーライル」は恰度「マコーレー」と正反對で「マコーレー」の極て常識的な批評に對して非常に哲學的な深遠な批評を爲た人であります、而して主に獨逸思想を籍りて獨逸の文學を英吉利に非常に紹介するとに努めた點に於て特別の効績がある。「カーライル」の哲學はやかましいもので人に依つては「カーライル」でなければならぬやうに言ひますが成程豪いかも知れませぬが、それは別問題として「マコーレー」に對してさういふやかましい風な態度を取つた事、それから又獨

逸の思想を紹介した事、是れ等は誰も一致して居る所のことであります、此人も同時に「マコーレー」と同じやうな歴史を書いてある、「フレンチレポリユーション」(佛國革命史)と云ふのがあります、此人も純粹の文藝批評としては何を擧げて宜いか分らぬ、澤山ありますが皆長い物ではない、「スコット」や「バーンス」などを論じた物が極く普通ありますがマアあゝ云ふやうな問題を取つて論じたのですが、純粹の文藝としては一寸判断が付かぬです、唯當時「マコーレー」と二人相對して而も殆ど反對した考を持って居つた、二の批評家である、斯ういふとは言へませう、デ文藝上の批

評に於ては今の詩人としてお話しした「マシユアーノルト」が最も重んぜらるゝ人であります。

マシユアーノルト

是れは「批評論集」と云ふ物を公にして殆ど批評の標準を示したと言ても宜い位であります。但し是れは斯ういふ本を一冊出したと云ふ譯ではない、始終書いた處の物を纏めて「批評論集」と云ふ名を以て世の中に出したので、先づ文藝上の批評に就ては「アーノルド」を以て始めるのが公平でせう又實際「アーノルド」は少も遺漏なく十分な批評をして居る、恰度「カーラ

イル」が獨逸の哲學を紹介した様に「アーノルド」は佛蘭西の文學に傾て居る、殊に「セントブーブ」と云ふ佛蘭西の批評の大家に深く負ふ處があつた。斯ういふ風にマア「アーノルド」を以て批評は大成したのですけれども、併し此外に未だ批評家は澤山あります。

ラスキン及び其他の批評家

藝術的批評の大家には「ラスキン」と云ふ人がありまして近世畫人論（モダーン、ペインターズ）といふ長篇をかき。「サイモンズ」といふ人は「レチツサンス」即ち文藝復興と云ふ之も長篇を書いた。また「ウオタ

ーペーター」と云ふ人があります、之も文藝復興を主として澤山の藝術的批評を書いて居ります、そんなやうな人がある、先づ評論はそれだけにして置きまして又更に前の小説の續きを言つて置きませう。小説の方は歴史小説の「キングスレー」で終らして置きました、それから女が澤山出て來ました。

ブロンテ

其第一は「シャーロット、ブロンテ」です、此婦人も教育はそれ程なかつたのですけれども、大變努力して犠牲的の生活を送つたと云ふ話なんです、この時代

の作は前時代の「デイッケンズ」「サツカレー」時代とは違て更に世の中の細い事、前より一步進めて極く普通の事柄に筆を進めたと云ふとに大變注意すべき處があるのです。詰り新時代の作である、「ブロンテ」の傑作は「ジエーン、エーヤ」といふのです、夫から名高い「ジョーシ、エリオット」是は「アダムビード」などと云ふ傑作があります、それから「サイラスマーナー」なども傑作の内に數へるべき物でせう。

エリオット

英吉利の小説は道德倫理を離れぬけれども「ジョージ

エリオット」になつて初て倫理を離れて心理小説になつたと云ふ。即ち「エシックス」の小説から「サイコロジ」の小説に爲たと云ふ評があります。是れは大變「エリオット」を賞めた話でありますが、夫は「エリオット」に至つて小説が「サイコロジカル」に爲たには違ひないですけれども、併し矢張倫理は脱けない、矢張英吉利流の「エシックス」が附纏つて居ることは確である、前のやうな批評は佛蘭西の批評家がして居るのですけれども、矢張倫理思想はどうしても脱けない。今諸家に就て挙げた何れの作を讀んでも矢張一種の固い倫理は始終附纏つて居る、併し其倫理は古臭い

勸善懲惡の倫理では勿論ない、其點に於て「エリオット」は新時代の道德を現はした者と言って宜いでせう。先づ女ではありませんけれども、男女通じての近頃の大家でせう、それから「スチブソン」是れは一寸變つた小説家です。

ステイヴンソン

「スチブソン」の小説は或は人に依つては面白くないかも知れませぬ、面白くないと云ふのはどういふとかと云ふとこの人は子供に讀ませるやうな小説を書いた、ズット前に譯されて居りました、文藝俱樂部に寶島と

云ふ小説がありました。海賊が遠方の嶋に寶を匿して置いた、それを取りに往くと云ふ、取りに往くだけでは冒険ではないですけれどもそれをイロ／＼な人間が同じ船に乗込んでイロ／＼な自的を有つて取りに往く。嶋に戦争がある、その記述、所謂普通の言葉で言へば海國男子の勇悍な態度が良く寫されて居る。それから少年の爲めに書いたものですから少年の氣力と云ふやうなとをよく現はして居ります。一寸讀んではそれほど面白くない、併し文章に於ては非常に宜い處があるし、それから男性的勇悍など云ふやうな處を書いたものとしては殆ど比類がない。大變強いものです。

夫から注意すべき事は「スチヴンソン」には女性の事を書く能力のなかつた事です。此人の小説は女拔きの小説で、全くないのではないが、中には出て居るものもあるけれども上手に書けない、此れは一寸珍しい事です。小説と言へば男と女が出て来なければ納まらないけれども、此先生ばかりのは男ばかりで済んで居る、皆冒險的です、「キッド、ナツブト」「ストレンジケース、オブ、ドクトル、ヂエキル、エンド、ミスター、ハイド」「プリンスワットオ」等は傑作です中にも此の「オートー」には多少女も出で居りまして大變面白い、又その前の「ストレンジ、ケース」云々といふのは變な小

説で「ドクトルヂエキル」と云ふ人と「ミスターハイド」と云ふ人との「ストレンジケース」則ち不思議な事件と云ふのですが是は病的の事を書いた者で、「ミスターハイド」と云ふ嫌な悪い奴が居る、併し夫はどうして何處に居るか分らない、夫で段々詮索すると「ドクトルヂエキル」と云ふ非常に善良な人と「ミスターハイド」と同じ人間である、どうして同じかと云ふと二重の人で、或時は「ミスターハイド」と爲て非常に悪い事をする、或時は「ドクトルヂエキル」と爲て非常に善い事をする、到頭しまいに此二重の人（ダブル、パーソナリティー）は死ぬのですが、是は餘りむづかし

いものではない、それから文學的にどの位價值があるか知りませぬけれども長くもなしそれからむづかしくもないのですから御讀みになつたら良いでせう。文學的價值はどの位あるか知らぬが併し世間には賞められて居る、マア斯ういふやうな人達が小説の方で名高いと言て宜いでせう、特に「スチヴンソン」などは極く新らしい文體を現はして居る、なほお話すべき人で此中に随分脱けて居るのも澤山あります、併しそれは詰り大体御話しなければならぬですから其時代の代表者であると云ふやうな、意味の作だけを擧げたのでありますから此間にはモツと澤山傑作とか大家とかがある

のです、短い時間の中でスツカリ出來ないと思ひましたから脱いて置きました、マア斯んなやうな有様で十九世紀が進んで來て居つた、併し是丈は此十九世紀の有様を纏めるのに就て御注意を願つて置きたいと云ふ事がある。即ち先刻御話をした希臘主義と「ヘブレイ、スム」即ち「クリスチアン」主義です、此二つが昔から始終争ふて來ましたが併し殊に十九世紀に於ては非常に盛んに兩方の思想が主義思潮となつて現はれて居つた、斯ういふとを注意して戴きたい、其代表者を言へば「キイツ」の「ヘレニズム」或「ブラウニング」の「ヘブレズム」とか「マシウアーノルド」に於て兩

方が調和して居ると云ふのである、夫からモウ一つ十九世紀に注意して置きたいとは科學の文學に及ぼした影響であります、其影響は一番手近なことを言へばなにかと言ふと「ダーウキン」の進化論であります、どういふ風に影響して居るかと言へば其進化論が其影響を與へたものである。一言に言へば人間と猿との祖先は余程近いものである、斯ういふ説が大に影響したのです。此説から考へると今まで人間は神様から出來たものである、神様が造つたものであるといふのに對しては人間は猿と親類であると、斯ういふことになつたのですから動物と同じになつた、それだけは科學の範圍

ですけれどもそれが大變な結果を萬事の上に出したかと思ふ、則ち此處に於て人間の獸性がナカク馬鹿に出來ないことになつて來た。

人間の獸性

今までは人間は道德的である、神聖なものである、斯う思つて居たものがドツコイさうでなくなつて來た、人間は下等な奴だ餘り猿と違はぬ者であるとなつて來ましたからさういふ風の人間の性質が深く研究されなければならぬことになつて來た、さういふ風な影響は自然に力を得て近頃新らしい小説に實際に現はれて來

て居る、不思議なことにはそれは英吉利には却て現れないのに大陸の方へ往つて現れて居る傾があります。

英國の獨創的長所

一體凡ての新思想新發見の火元は多く英吉利にあります。非常に保守の國ですけれども事を起すのは英吉利です、佛蘭西の革命でも元の起りは英吉利にある、元來英吉利は非常に自由を尊重する國である。極く古い事を言へば「コロムウエル」が「チャールズ」王を殺したとは佛蘭西革命の元になつて居ると言つても差支ない。即ち「ヂッケンス」「サツカレ」が佛蘭西の自

然派の元になつて居ると同じく「ダーウキン」が自然主義の元になつて居る、斯ういふ風な科學の影響が非常なものであつてそれが文學を打壞はすと思ひの外却つて文學の範圍を擴めて呉れるやうになつて來た。

文學と科學

此科學が文學を打ち壞さずに却つて一致し互に助け合つて往つたことは不思議な現象であります。この科學の發達といふ事は今日の文學を見る上に於て大いに注意しなければならぬことと思ひます、それから英吉利のことはそれ丈けとして更に一番始めに御話したや

うに英佛の文學は長く續いて來た文學である、そこへ持つて往つて今日では露西亞とか或は「スカンデナヴィヤ」とか「スラブ」とかの文學が盛になつて來た。是れは其人種獨特の新しい趣味を有つて居りますからさういふものに就ては又新しい研究をしなければならぬ、今述べた「ヘレニズム」とか「ヘブレイズム」等とは又別の趣が文學へ這入つて來て居るに違ひない、それらの新しい文學を見るのにはさういふことに注意しなければならぬですが、英吉利の文學に於ては今申したやうな事に注意して頂けば良からうと思ひます、なかなか大體の御話しも出來ず。却つて理屈計りを述べたや

うでしたが時間がないのですから仕方がありません。



英文學講話 終

明治四十一年十一月十五日印刷
明治四十一年十一月廿二日發兌

不許複製

正價金卅五錢

著者 戶川 明三

發行者 伊東 芳次郎

東京市本郷區本郷一丁目九番地

印刷者 伊東 靜子

東京市本郷區新開堀三丁目四番地

印刷所 近藤商店印刷所

東京市本郷區日吉町十番地

發行所 東京市本郷區 振替口座一七一
本郷一丁目九 電話下谷一九三八 東亞堂書房

發行所 東京市本郷區 振替口座二二七〇
電話新橋二二三一 番地 東亞書院

特約發賣店 東京市本郷區 振替口座二八二三
大坂東區北渡邊町杉本書店

文學士大町桂月先生著

○作文法講話

(國民新聞批評) 文章に名ある大町桂月氏が作文に關せる講話を何くれと無く集めたり引例をあらわする方面より引き來る縦横無盡に言つて除くる處面白し

(報知新聞批評) 文章の見方、作法、文法に對する心得、文章の種類等に就て簡明平易に書きたるものなれば文を學ぶ青年學生には有益の書也

(北國新聞批評) 初學文に志す者の好師友たるを失はず

▲中判全一冊…定價三十錢…送料四錢▼

▲現時文壇の二大家が名著を見よ!!!

野口米次郎先生著

○邦交日本少女の米國日記

阪井紅兒先生畫

(大阪朝日新聞批評) 少女の空想に驅られ自から東西風俗習慣人情の變化を可憐の日記に知らず、説明するあたりさすが歐米の文界に於て詩人と謳はれし人の作としてほさもあるべき著なり所々に諷刺的譬句の吐かれたるあたり詩人の散文として面白しと云ふべし

(神戸又新日報批評) 野口米次郎氏が曩に英文を以て本書を著はし外人間に聲譽を博したるが今回英學者の便を計るため且つ英文を解せざる讀者に供せんがため、自著を自譯したるもの一種灰殻式部の日記として目先の變りたる所趣味なり

▲洋風美術製本…定價七十五錢…送料八錢▼

聞記者新 柳塘僊史著

新刊 漢詩講話

附 俳句と漢詩

漢詩は日本文學の根底である、古來文章でも、和歌でも、俳句でも、悉く漢詩の有力な影響を被らぬものは少しも無い。殊に俳句の如きは、性質上漢詩の日本化したものと云ふても差支へない。と云はれるのが柳塘僊史の持論である。漢詩とは如何なるもので、如何にして之を作り、且つ味ふべきものであるかとの問題を多趣多方面に解釋し、更らに僊史が新案の作詩法秘訣を説いて、興味を裡に實益を興へ、漢詩と云ふ一問題の下に文學全體を知らしめると云ふのが即ち本書の特色である。

▲洋裝全一冊…體裁瀟洒…定價五十錢…郵稅六錢▼

▲東亞堂發兌文學講話叢書の新珍たり!!!

文學士尾上柴舟君述

近新派 和歌講話

全一冊(印刷中)

文學士 佐々醒雪君序

好評
七版
俳句講話

俳句は如何にして作るべきか、俳句は如何にして味ふべきか、抑も俳味なるものは果して那邊に存するや。本書は此等一切の問題に趣味饒き解案を興へ、以て乾燥せる現時の人心に一味の清風を貼せんとす。何人と雖も案頭一本を缺くべからず。

文學士 沼波瓊音君著

▲小杉未醒君裝幀……美裝全一冊……定價四十錢
郵税六錢

▲俳句を愛好するの士にして此の二書を携へざるは、魚群を望んで網を有せざるの憾みあらむ。

文學士 久保天隨君序

好評
三版
俳句研究

本書は俳句の研究たると同時に、自然の研究也、美の研究也、又人生の趣味研究也、著者が筆鋒の觸るゝ所、物皆油然として俳趣を生ず。俳人たるを然らざるとを問はず、一本を繕いて、津々たる十七字詩の美樂に酔へ。

文學士 沼波瓊音君著

▲俳句講話同裝……美本全一冊……定價四拾錢
郵税六錢

文學士 沼波瓊音君著

新刊
俳句階梯

本書は沼波文學士が、多年研鑽の結果、吾人が俳句の門に入るの手引草として、通俗平易を旨とし、口述せられたる新著にして、往古連歌俳句の沿革より、俳句の性質を詳説し、作法及作句上の諸注意、并に俳句練習の秘訣に及びたるもの、俳家必讀の良書にして又風流の道しるべたり。

▲中判全一冊……洋裝風雅……定價三十錢……郵税四錢

▲俱に之れ蕭索たる荒野をして駘蕩たる春風を渡らば、枯木の生活をして趣味を生ぜしむるもの！

文學士 沼波瓊音君著

近刊
默想の天地

カーライル曰ク『靜默の世界は獨り大なり』と。天地は默して言なしと雖も雄辯の極は辯なきに歸す、自然の默して言なきは、豈微妙の天歌を奏しつゝあるに非らずや、此天歌や心聽すべくして、耳聞すべからず、著者の如く洒脫高逸の天資を有するの士にして、始めて是れを詩化傳誦することを得べし、宇宙公然の秘密に侵入して、自然の妙趣を嘆美せむと欲するものは來て本書の風骨に接せよ。

▲中判全一冊……洋裝數奇……定價……郵税

京都大學 幸田露伴先生
文學士 笹川臨風先生 序

近刊 名家 俳句大成 全一冊(印刷中)

文學士 沼波瓊音 編

▲俱に俳壇の珍什希寶!!!!!

文學士 沼波瓊音先生校閱

再版 俳味禪味

四海庵宮垣角人先生著

俳味とは如何? 禪味とは如何? 蓋し禪味を解するの士にして亦始めて俳味を談すべし。本書は俳禪芭蕉によりて建設せられ、鼓吹せられたる俳味禪味の骨髓を明にして、「寂」趣味の福音を宣傳し、極端なる物質萬能主義に茶毒せられたる現時の人心に一大覺醒を與へ、以て虛飾を去りて簡易に就かしめ、枯淡の生活をして趣味を生ぜしむ。近時思想界の革新命兒たり。
▲小杉未醒君裝幀……全一冊頗風雅……定價四十錢……郵稅四錢▼

文學士 武島羽衣君序

新刊 和歌作法

慶應義塾 國文科教師 志賀華仙君著

▲俱に和歌を學ぶ者の双翼たらむ!!!

本書は歌學、作法、歌調、詠歌上の諸注意の四章に分ちて、先づ筆を和歌の沿革に起し、懇切に作歌習練の秘訣を説きたる上、更に盤頭に附するに類語、枕詞、歌の形式等を以てせるものにして、武島先生は本書に序して「細やかにして煩はしからず、心得易くして早しきに流れず、この道の隈々人の迷ふべき所々を説き明らかにせられたるは、げにをばるげならぬいたづきとやいはまし」と評せられたり。以て如何に其有用の好著たるかを知るに足るべし。
▲中判全一冊……體裁優美……定價三十錢……郵稅四錢▼

東京開成中學校國語漢文科講師 佐藤仁之助君著

再版 新案 百人一首通解

守珍新形美本

小倉百人一首をあいいうえお順に排列し、ごくわかり易く解釋した。百人一首を覺えるためにも、亦和歌を習ふ人の參考にも至つて便利な可愛い本! 年末歳首の御進物用などには外に類なき適當品です。
▲全一冊壹百餘頁……定價十錢……郵稅貳錢▼

楓村居士先生著

新刊 傳奇 俠雄錄

俠雄の豪快なる、佳人の悲壯なる、春夜の密談は蜜の如く、雪夜の情話は清きと水に似たり、巨賊あり、怪窟あり、男か女か得て解すべからざるは小迷にあらずや、毒婦の奸譎、悪吏の陰忍、嗚呼危い哉東洋の老友邦！龍圖虎搏の活劇場裡に清國內地の珍習奇俗を知悉せしむるは、是れ楓村居士が踏遊の寫實小説！！

▲阪井紅兒君著……大判全一冊……定價六十錢……郵税八錢▼

▲俠雄録は澎湃たる怒濤の巖角に激するが如く、新寫生文は潑潑たる清流の幽溪を走れるに似たり。

高濱虚子先生 共著 阪本四方太先生 共著

新刊 新寫生文

寒川鼠骨先生 共著 長塚節先生 共著

◎本書の内容

夢の如し 四方太。

歸省雜事 鼠骨。

佐渡が島 節。

叡山詣 虚子。

この書は目下寫生文派の中心たる前記の四君が、其代表的の長編各一編を選んで成申文壇に一新紀元を劃せられたもので、現在新文壇の一大勢力たる寫生文の如何なるものたるかを知らしめ、最も進歩せる文學の趨勢を研究せんと欲する諸君の必ず見逃すべからざる好著である。▲全一冊……洋裝頗開雅……定價五十錢……郵税六錢▼

東京開成中學校國語漢文科講師 佐藤仁之助先生編

參版 漢字異同辨 及用法

本書は同訓或は同音にして其意義を異にせる漢字の異同を辨じ、更らに一々用例を示して、懇切に其應用法を説きたるものにして、世の操觚の業に従へる諸君は勿論、日常作文の参考書として、萬人必携の寶典也。

▲寸珍クローズ洋裝全一冊二百四十頁 ▲定價金貳拾錢、郵税金貳錢▼

▲便益無比……真に文章家袖中の珍寶たり！！！！

佐藤仁之助先生校補 東亞堂編輯所編

增訂 四版 國語異同辨

本書は國語の中に於ける同字同音の語句、或は類似の文字にして、其意義を異にするもの數千言を對照し、一々懇切に其異同を辨じたるものにして、斯學に於て堪能の聞え高き佐藤仁之助先生の嚴密なる校補を經、且つ同先生の新案に成れる便利なる假字用法及動詞語尾區別表を附したれば國語研究者の參考として、有益無比の良書也。

▲寸珍全一冊……登百九十頁……定價拾五錢……郵税貳錢▼

◎假字用法及誤り動詞語尾區別表 全一葉 此表のみ御入用の諸君には定價六錢 郵税(八部迄)貳錢にて貴需に應ず

東京開成中學校 國語漢文科講師 佐藤仁之助先生著 (最新式編纂)

受験
参考

日本文法解義

美裝全一冊
紙質佳良
定價四拾五錢
郵税六錢

本書は佐藤先生が、從來文法書の徒らに多岐多様にして煩瑣にのみ流し、善く要を撮り、綱を提げ、一讀直ちに其要領を會得して、實際の活用に資するもの鮮きを概し、日常教授上の實驗を基礎とし、數年間に瀕りて慘憺の經營を費されたる結果、從來に類例なき新式を以て、編纂せられたる新著にして、本文中五號活字の分のみ抄讀すれば、よく日本文法の大躰に通ずるを得べく、又六號活字の分をも併せ讀むときは、則ち文法の蘊奥を會得して應用自在たるに到らむ、且つ附するに各種専門學校入學試験問題并に教員檢定試験問題を以てし、一々其解答の方法を示されれば、之れを受験準備の參考として、將た中學上級及び補習科用として使用せられれば、必ずや其勞少くして得る處の多きに驚かむ。

幸田露伴先生著

訂正
三版

潮待ち草

阪井紅兒壽伯裝釘
全一冊洋裝優雅
定價八十五錢
小包料八錢

潮待ち草は露伴先生の隨筆也、自然觀也、人生觀也、はた社會百般の事物に對する觀察録也。詩を談じ、文を品し、史を論じ、處世を説きて、真に他の企及すべからざる妙趣あり。以て品性修養の資とすべく、以て後進文を學ぶの範とすべし。附録「土偶木偶」の一篇も、亦先生が近作小説中の白眉にして、相俟つて讀書家諸君が案頭の光彩たらむ。

幸田露伴先生著

好評
参版

小
はる
さめ
集
説

大判全一冊
希有の美装
定價七十五錢
小包料八錢

●本書の内容

一口劍三篇。風流佛十二段。みれん五章。

本書收むる所の三卷、悉く之れ明治文學史上特筆筆記すべき希世の名作たるは世已に定評あり。而かも刊本夙に絶えて其得易からざるを憾みとし、乃ち先生に請うて合刻す。今や参版成る、文壇の缺陷今日より完たからむ。

幸田露伴先生著

高評
再版

沼田穎川先生註
註
二日物語
釋

全一冊洋布美装
定價四十錢
郵税四錢

二日物語は露伴先生が傑作中の翹楚たり、今其全文を引きて精到なる註釋を加ふ。『此一日』の何ぞ凄婉にして『彼一日』の何ぞ悲壯なるや。渾身是詩の權化たる西行法師の心胸を活寫せし此一大名篇は、本書によりて更に讀者と近親の便を加へたるものと稱すべし。

著生先伴露田幸

新作

頼

朝

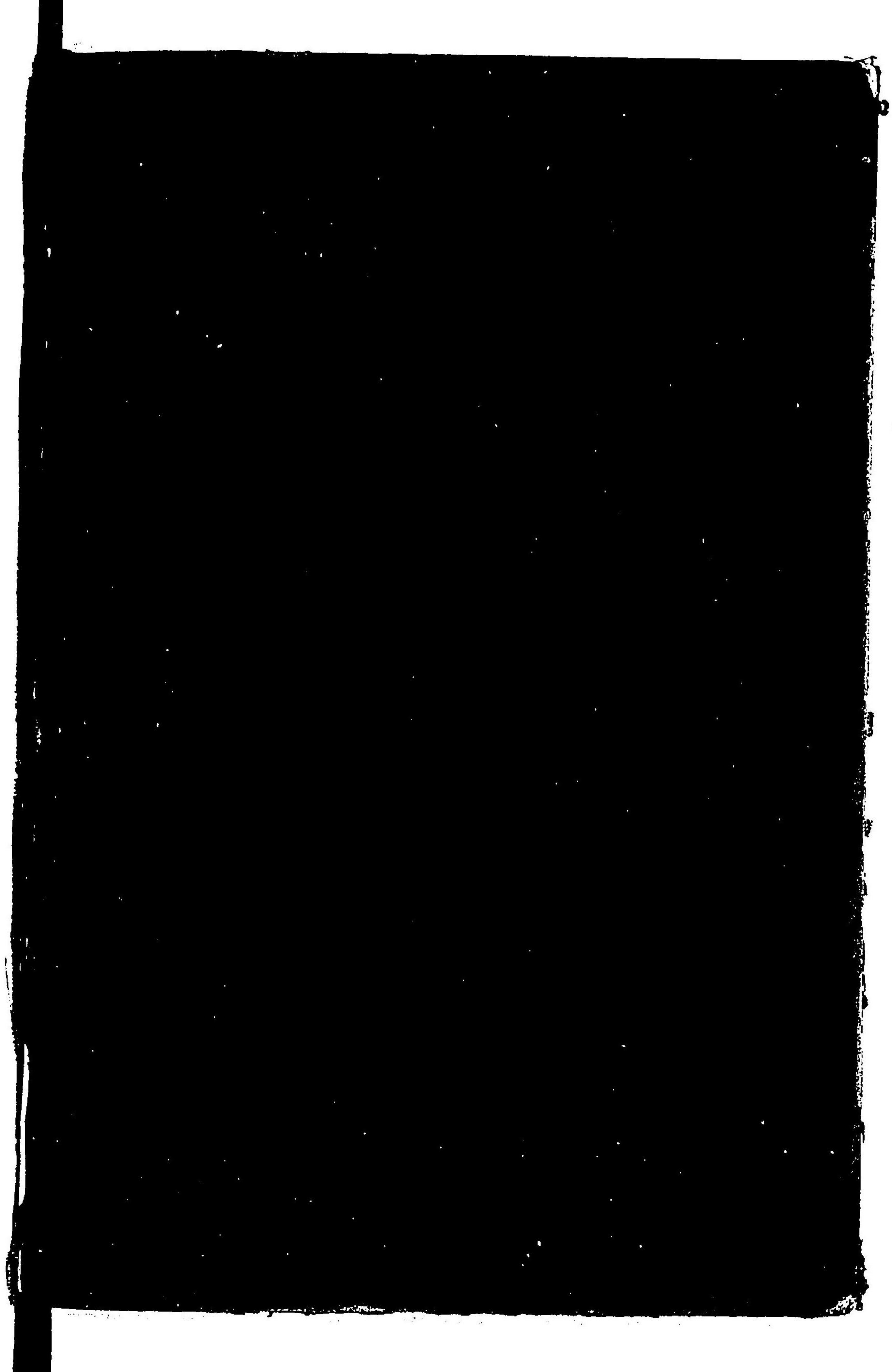
阪井紅兒君書
大判頗美製本
正價金一圓拾錢
郵税金八錢

頭大公の生涯は眞に努力奮闘の連続なりき。數奇なる運命の手は、幼にして斬らるべかりし英雄を伊豆に送りて更に失戀喪兒の苦がき慘雨を降し、將に枯れなむとせし野心の萌芽を培ひて、疾風迅雷、倏忽として覇業創建の大活劇を演せしむ。史を讀む者誰か慨然として志を立てざらむや。露伴先生此古英雄が埋没せる個人的事蹟に興味を有せらるゝこと久しく、博參宏證、斯一篇を成す、文詞渾麗、理趣精徹、近時文壇史壇の一偉觀たり。

17

379

17
379





Ⓜ

084691-000-8

17-379

英文学講話

戸川 秋骨 / 著

M41

DBA-0015



